

## 中国東北地方における先史土器の編年と地域性

宮 本 一 夫

【要約】 中国東北地方における各地域の個別土器編年の提示を行い、地域間相互の共伴関係、変遷過程の相似性あるいは周辺諸地域の関係から、遼東半島土器編年を中心に、当該地域の土器編年網を確立した。その上で、土器地域圏の変容を示し、新石器時代から青銅器時代への変遷過程上の特徴を表わした。すなわち、ほぼ新石器時代を一貫して遼西、遼東、黒龍江省という三土器地域圏が鼎立しており、新石器時代末に一部地域圏の変容を示しつつ、その地域圏の決定的崩壊が青銅器時代段階に存在する。その段階には、遼西から遼東・黒龍江省へ青銅器が伝播すると共に、これまでの地域圏を凌駕する形で、新しい土器組成が拡散し、地域圏の拡大が認められる。しかしながら、新石器時代末の地域圏の変容が盾となることにより、その土器組成の変革は瀋陽地区以北に限られている。遼東半島から西北朝鮮一帯の土器にみれる地域性は、燕文化が伸長した段階でも、その伝播範囲を自らの地域圏内にとどめさせており、その地域圏を越えて本格的に中原の文物が朝鮮半島に流入するのは、秦漢帝国の成立に至ってからである。従って、当該地域の編年網を確立することは、東北アジアの先史社会を考える際の基礎的な編年網となろう。

史林 六八巻二号 一九八五年三月

### はじめに

長城は、北方の遊牧民と定着農耕民である漢人との対立抗争の場として象徴化されている。同時に、その対立抗争こそが中国史を動かしてきた一つの動力源であった。長城を越え、東夷の地まで版図に入れたのは、上谷郡以下五郡を設置した燕の動きである。この動きは、諸種族を内包する中国東北地方を、中国史書上に恒常的に登場させる契機となった。その時期は、燕の昭王代、すなわち戦国後期にあてるのが一般的である。

本稿では、中国系文物が直接的に当該地域に流入し始め、本地域を恒常的に歴史の舞台に登場させたと考えられる燕の五郡設置を以て、それ以前を先史と規定し、中国東北地方の先史土器の様相を探ることとする。そのために、土器編年とその分布域を明らかにすることから始めたい。これは、考古学上の文化を知り得る最も有効な方法であり、文化単位をより細かく把握する場合に適していると考えられる。そこで、まず分布域をもととした地域別での個別編年の提示を行う。その後、地域別編年を統合することにより、中国東北地方の先史土器編年網を得ることとする。その総合化にあたっては、資料が最も豊富である遼東半島編年を基準とし、周辺諸地域との関連の中から、時期的併行関係を決定することとしたい。そして、この編年網の上に、土器地域圏の変遷を示そうとするものである。

ところで、基準とすべき遼東半島の先史土器編年は、学史的にはどの様に形成されているのであろうか。戦前には、東亜考古学会・日本學術振興会によって進められた一連の調査<sup>①</sup>があるものの、資料不足や分層発掘の不十分さのために、それらの正確な位置づけが十分為されないままに終わっていた。先史土器編年案が示されたのは戦後になってからである。最初に編年案を示したのは佟柱臣であった<sup>②</sup>。その後、中朝合同調査の成果をもとにした朝鮮民主主義人民共和国(以下、共和国と略称する)の編年案は、飛躍的に進歩したものであった<sup>④</sup>。近年、中国側の分層発掘の成果をもとに遺跡別・層位別の相対序列が整理されつつある。許玉林や小川静夫の論攷がそれである。両者を見比べた場合、共和国側の編年案・発掘資料を参考にしている小川の方がより詳しいと言えよう。但し、両者とも層位の序列化に終始しており、土器の系譜関係や様式観に意が払われていない。そこで、本稿では、両者の層位序列とは大きく異ならないものの、少ない一括遺物を基準にして、従来一時期と考えられた土器群の細分化の努力を行う。更に、戦前の未発表資料の分析に従って、より詳しい編年の作製を目論みたい。特に、これまでかなり大まかな編年観しか示されていなかった殷代併行期以降に注目する。同時に、型式学的研究方法による系譜関係の追求と土器組成の把握を為したいと考える。

① 澄田正一「遼東半島の先史遺跡」(『樞原考古学研究所論集』第四一九七九年)。

② 佟柱臣「東北原始文化的分布と分期」(『考古』一九六一年第一〇期)。

③ 朝中共同発掘隊『中国東北地方の遺跡発掘報告』一九六六年。

④ 社会科学院考古学研究所・歴史研究所「紀元前千年紀前半期の古朝

鮮文化」(『考古民俗論文集』第一輯一九六九年)。

⑤ 許玉林・許明綱・高堯璇「旅大地区新石器時代文化和青銅時代文化

概述」(『東北考古与歴史』第一輯一九八二年)。

⑥ 小川諒夫「極東先史土器の一考察」(『東京大学文学部考古学研究室

研究紀要』第一号一九八二年)。

## 一 地域区分

かつて、佟柱臣<sup>①</sup>は中国東北地方を六つの地域に分けて原始文化の分布と分期を説明しようと試みた。大勢では、これらのまとまりが現時点でも有効性を持っていると考える。シラムレン河流域を含む遼河以西から燕山以北にかけての遼西、遼東半島、吉林・長春を中心とする吉長地区、大安・扶余など吉林省北部を含む松嫩平原、三江平原・牡丹江流域、図們江流域である。この内、図們江流域は、咸鏡北道を中心とする東北朝鮮と共に考えるべきであり、本稿では取り上げない。さて、これらの地域区分を先史時代を通じてより大きな地域圏として包括するならば、結論的に言って、遼西、遼東、黒龍江省の三地域圏にまとめられよう。この内、遼東としたものは遼東半島、吉長地区をさすが、それらの他に、両者の中間に位置する渾河流域を中心とした瀋陽地区に注目する。ここでは、近年遺跡が集中して発見されており、一つの地域的まとまりとして捉えることが可能であると共に、遼西と遼東を対比する場合にも重要な位置に立地している。更に、これら諸地域に加え、同種の土器分布圏を示す西北朝鮮を議論の対象とし、遼東としての広範な地域圏の特色とその影響関係を示していきたい。また、松嫩平原、三江平原・牡丹江流域をまとめて黒龍江省として一地域圏と見做す。楊虎<sup>②</sup>は黒龍江省を更に細かく地域区分しているが、現資料からみれば、この二地域以上に個別編年を示すことは困難であり、資料数の増加を待って地域細分を行いたい(第一図、第一表)。

① 佟柱臣「東北原始文化的分布と分期」(『考古』一九六一年第一〇期)。

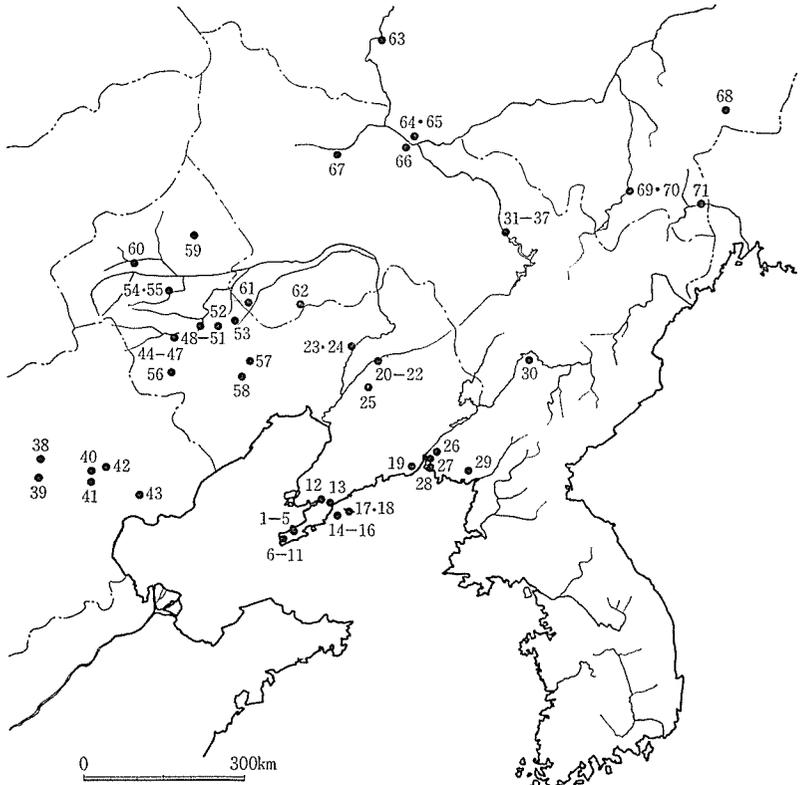
② 楊虎・譚英傑・張泰湘「黒龍江古代文化初論」(『中国考古学会第一次年會論文集』一九七九一九八〇年)。

第1表 中国東北地方における先史時代主要遺跡地名表

地 区	遺跡 番号	遺 跡 名	所 在 地
遼 東 遼東半島	1	双 砬 子	遼寧省旅大市甘井区
	2	四 平 山	遼寧省旅大市甘井区
	3	文 家 屯	遼寧省旅大市甘井区
	4	崗 上 墓	遼寧省旅大市甘井区
	5	楼 上 墓	遼寧省旅大市甘井区
	6	羊 頭 窪	遼寧省大連市旅順口区
	7	老 鉄 山	遼寧省大連市旅順口区
	8	郭 家 村	遼寧省大連市旅順口区
	9	尹 家 村	遼寧省大連市旅順口区
	10	於 家 村	遼寧省大連市旅順口区
	11	砬 頭 積 石 墓	遼寧省大連市旅順口区
	12	双房石蓋石棺墓	遼寧省新金県
	13	单砬子・高麗寨	遼寧省新金県
	14	小 珠 山	遼寧省長海県広鹿島
	15	吳 家 村	遼寧省長海県広鹿島
	16	蛎 砬 崗	遼寧省長海県広鹿島
	17	上 馬 石	遼寧省長海県大長山島
	18	高 麗 城 山	遼寧省長海県大長山島
	19	後 洼	遼寧省丹東市東溝県
瀋 陽 地 区	20	新 楽	遼寧省瀋陽市
	21	肇 工 街	遼寧省瀋陽市
	22	鄒 家 窪 子	遼寧省瀋陽市
	23	偏 卜 子	遼寧省新民県
	24	高台子(高台山)	遼寧省新民県
25	二 道 河 子	遼寧省遼陽県	
西 北 朝 鮮	26	美 松 里	平安北道義州郡
	27	双 鶴 里	平安北道龍川郡
	28	新 岩 里	平安北道龍川郡
	29	堂 山	平安北道定州郡
	30	土 城 里	慈江道中江郡
吉 長 地 区	31	二 道 嶺 子	吉林省吉林市
	32	碾 磨 山	吉林省吉林市
	33	西 团 山	吉林省吉林市
	34	星 星 哨	吉林省吉林市
	35	騷 達 溝	吉林省吉林市
	36	長 蛇 山	吉林省吉林市
	37	土 城 子	吉林省吉林市

中国東北地方における先史土器の編年と地域性（宮本）

遼 西	38	雪 山	北京市昌平県	
	39	琉璃河1号墓	北京市房山県	
	40	孟 格 庄	河北省三河県	
	41	大 垞 頭	河北省大廠回族自治県	
	42	張 家 園	天津市薊県	
	43	大 城 山	河北省唐山市	
	44	赤 峰 紅 山 後	遼寧省赤峰市	
	45	駒 蛛 山	遼寧省赤峰市	
	46	豹 王 廟	遼寧省赤峰市	
	47	西 水 泉	遼寧省赤峰市	
	48	四 稜 山	遼寧省昭烏達盟敖漢旗小河沿公社	
	49	三 道 湾 子	遼寧省昭烏達盟敖漢旗小河沿公社	
	50	南 台 地	遼寧省昭烏達盟敖漢旗小河沿公社	
	51	白 斯 郎 營 子	遼寧省昭烏達盟敖漢旗小河沿公社	
	52	石 羊 石 虎 山	遼寧省昭烏達盟敖漢旗新惠	
	53	大 甸 子	遼寧省昭烏達盟敖漢旗大甸子公社	
	54	石 棚 山	遼寧省昭烏達盟翁牛特旗	
	55	大 泡 子	遼寧省昭烏達盟翁牛特旗	
	56	南 山 根	遼寧省寧城県	
	57	豊 下	遼寧省北票県	
	58	魏 營 子	遼寧省朝陽県	
	59	富 河 溝 門	遼寧省昭烏達盟巴林左旗	
60	沙 漓 子	遼寧省昭烏達盟林西県		
61	大 沁 他 拉	吉林省哲里木盟奈曼旗		
62	西 梁 墓 地	吉林省哲里木盟庫倫旗格爾公社卧力大隊		
黒龍江省	松 嫩 平 原	63	昂 昂 溪	黒龍江省齊齊哈爾市
		64	白 金 宝	黒龍江省肇源県
		65	望 海 屯	黒龍江省肇源県
		66	漢 書 屯	吉林省大安県
		67	双 塔 屯	吉林省洮安県
	三 江 平 原 牡 丹 江 流 域	68	新 開 流	黒龍江省密山県
		69	鶯 歌 嶺	黒龍江省寧安県
		70	团 結	黒龍江省寧安県
		71	大 城 子	黒龍江省東寧県



第1図 中国東北地方における先史時代主要遺跡分布図

## 二 遼 東

—— 地域別土器編年 (一) ——

### (一) 遼 東 半 島

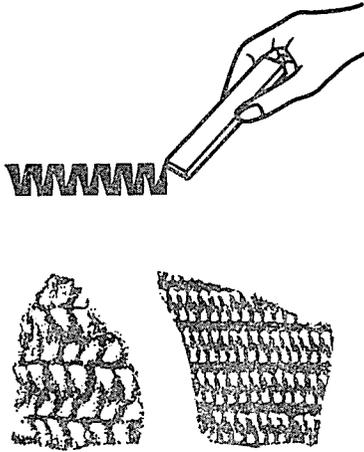
層位別あるいは遺跡別での时期的対応関係を第二表に示した。これらは層位関係の検証等をもとに同種土器群と考えられるものをまとめたものである。この様にして作られた層位序列を各々一時期と認識することにより時期設定を行い、各時期の土器の特徴ならびにその細分案を示していく。

小珠山<sup>①</sup>はこの地域の標準遺跡の一つを為す。小珠山下層は、第二表に示した様に遺跡単位での層位の差し引きからみて、現時点で最も古い土器群と考えられ、この層を小珠山下層期と設定する。小珠山下層は、平底の深鉢を主体とし、少量の壺を伴う。滑石を混入する土器が主であ

第2表 遼東半島先史時代土器編年表

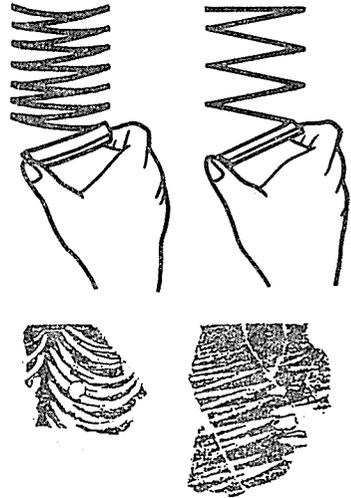
編年	包含層	墓葬
小珠山下層	上馬石下層	
小珠山中層	郭家村5層	
吳家村	郭家村4層 文家屯A地点 郭家村3層	
小珠山上層	上馬石中層 郭家村2・1層 南文家屯B・C地点 蛎磧崗	四老將 平鉄軍 山山山
双砬子1期	於家村下層 高麗城山	↑ 单 砬 子 ↓
双砬子2期		单砬子1号墓 单砬子2号墓 双砬子積石塚
双砬子3期	於家村上層 羊頭窪	↑ 高 麗 寨 ↓
上馬石A地点下層	↑ 尹家村下層1期	花頭積石墓 双房2号 上馬石2号瓮棺墓
上馬石A地点上層	上馬石 上層 上馬石BⅡ地点	1号住居址 崗上墓下層 双房6号 石蓋石棺墓
崗上墓・楼上墓		
尹家村12号墓	尹家村下層2期	

遼東(短幅連続弧線文)



(小珠山 縮尺 $\frac{1}{2}$ )

遼西(長幅连续弧線文)



(赤峰紅山後 縮尺 $\frac{1}{3}$ )

第2図 ロッカーパターン対比図

る。文様は主として横走ロッカーパターン(第四図2~5)に特徴がみられる。これは遼西のロッカーパターンと施文原体を異にする。遼西に比べ施文原体の幅が短い傾向を示すと共に、施文具の端を交互に支点として施文していく間隔が短いという特徴を示す(第二図)。また、密接に横走して施文する文様構成が多いのもその特徴である。この様なロッカーパターンを、遼西と区別して考える意味で、短幅連続弧線文と命名する。また、篋描き状沈線文(第四図1~4)がみられ、単独あるいは短幅連続弧線文と組み合わせさせた形で、菱形集線文(同2)、三角集線文(同1)などが施される。更に刺突文(同7)や擦過状沈線文(同6)がある。刺突文や擦過状沈線文と短幅連続弧線文とが厳密に共存するものかどうかは明らかではないが、少なくとも短幅連続弧線文と集線文は、同一土器に施文される事実からも、両者が一時期共存していたことは確かである。

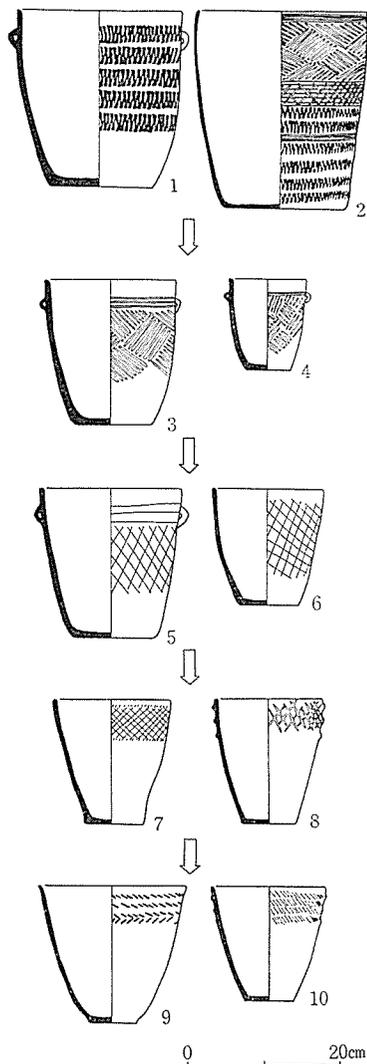
層序的に小珠山下層につぐものは小珠山中層である。報告では、小珠山中層と呉家村をまとめて小珠山中層文化として設定している。これに関しては、郭家村の層序により明らかに区分して考えることが可能である。すなわち、郭家村5層

が小珠山中層に、郭家村4層が呉家村に対応する。また、搬入品と思われる山東の大汶口文化の土器は、小珠山中層に山東省博物館の言う大汶口文化3期、呉家村に大汶口文化4期のものが伴出していることから、両者を時期差として捉えることができる。そこで、前者を小珠山中層期、後者を呉家村期として設定する。

小珠山中層期(同8・16)には、胎土に滑石を含む土器が少なくなり、夾砂紅褐陶が主流となる。紅衣を施した所謂赤色磨研土器も出現している。器種は壺、平底深鉢、浅鉢などがあげられる。施文法としては篋描き状沈線文系であるが、小珠山下層期に比べ細線であり粗雑化している。文様は集線文系(同10・13)で小珠山下層期の系譜をひくものである。平底深鉢にみられる綾杉文(同8・9)は、集線文の系譜上に成立したものととも理解されるが、朝鮮半島の魚骨文との関連も考慮される。また、山東の大汶口文化の広がりを示すものとして、その搬入品と思われる三足觚形器(同16)がある。これは山東省博物館の言う大汶口文化3期にあたり、最近の韓榕ら<sup>⑤</sup>の見解に従えば大汶口文化前期に属する。また彩陶(同14・15)や鼎は大汶口文化の影響によって成立あるいは持ち込まれたものであり、特に山東省蓬萊県紫荆山下層との関連が深い。

続く呉家村期(同17・26)には、搬入品と思われる鬲(同26)や盃が伴う。これらは大汶口文化4期に相当し、大汶口文化中期に属すると考えられる。器種は小珠山中層期同様、壺、平底深鉢、浅鉢などである。文様は口縁部にみに文様帯が限られるところに特徴がある。短斜線文を中心とし、それに斜格子文が組み合わさる場合もある。共に線の細かい篋描き状沈線文であり、短斜線文に関しては押し引き状のものも存在している。

朝鮮半島に接して鴨緑江下流に位置する丹東市東溝県後洼は、短幅連続弧線文土器(第三図1)、篋描き状集線文土器(同3・4)、斜格子文土器(同5・6)から成り立っている。この内、短幅連続弧線文土器は小珠山下層期に併行するものと考えてよい。篋描き状集線文土器は、単独で施されているところからみても、小珠山下層期より後出する可能性があるが、小珠山中層期まで粗雑化していない。また、斜格子文土器は呉家村期の特徴的文様であるが、文様帯が口縁部に集約され



第3図 遼東半島新石器時代土器変遷  
想定図

(1, 3~6: 後洼 2: 小珠山  
7, 9: 吳家村 8, 10: 郭家村  
縮尺 1/10)

ていない点や、集線文土器と文様構成を同じくしている点、集線文土器の系譜をひく土器とすることもでき、吳家村期の段階より前出する可能性がある。この様に、小珠山下層期から吳家村期にかけては、密接した短幅連続弧線文土器から、それに伴う筐描き集線文が単独に施され、それが細線・粗雑化し斜格子文に退化していき、文様帯を次第に狭めて口縁部文様帯のみが施される様になる(第三図)。この流れが妥当なものであるとするならば、吳家村期の短斜線文はこの系譜の最も新しいものと言えよう。その退化文様構成の展開を知る上で、吳家村期に併行する文家屯貝塚A区<sup>⑧</sup>を参考にしたい。

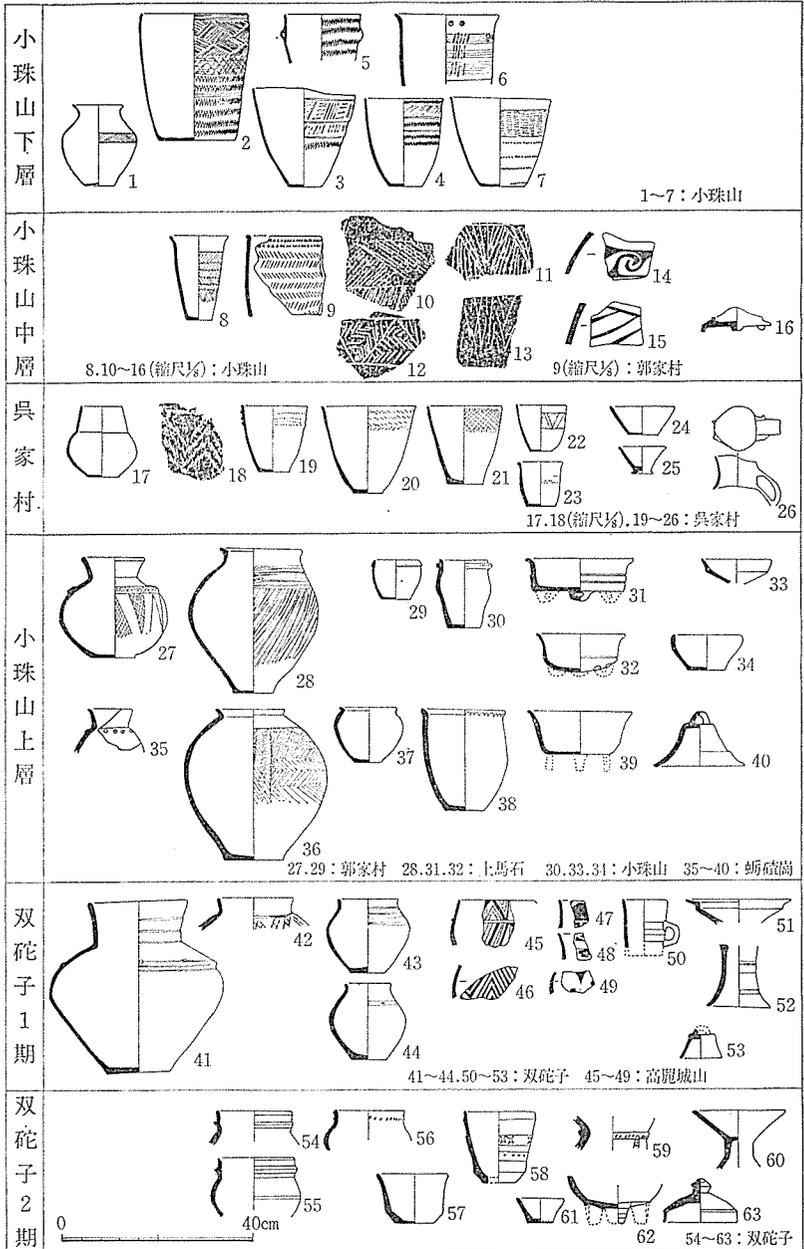
文家屯貝塚A区は、人工層位で三層に分層されているが、層位的な変化は見いだし難い。ほぼ完形の深鉢がAⅡ区最下層の住居址に相当する地点から発見されている。これは短斜線文と斜格子を組み合わせたものと、やや太目の斜格子沈線文からなるもので、文様帯を口縁部に集約させている点、吳家村期の特徴を示している。この様な吳家村期に相当する文家屯貝塚A区において、文様は刺突文、押し引き状短斜線文、沈線文系短斜線文、斜格子文の四類に大きく分類できる。層位的所見がないため、これらの変遷過程は明らかではない。この内、押し引き状短斜線文は小珠山中層期の刺突文(第

四図⑨)の系譜が想定でき、文様構成上、朝鮮半島との関連が考えられる。また、斜格子文は、上記の文様変遷の想定からすれば、その系譜上の退化形態と言えよう。そして、沈線文系短斜線文も、この退化過程の中で考えることは可能であろう。さて、ここでは赤色磨研土器が出土しており、器形は不明だが壺である可能性が高い。これは小珠山中層期にも存在し、呉家村に少数ながら存在するところからみれば、小珠山中層期・呉家村期の特徴を為すものと言えよう。

以上の様に、小珠山中層期・呉家村期は大汶口文化の影響を受けるが、器種的には深鉢を中心とした小珠山下層期の系譜をひくものであり、新たに浅鉢、赤色磨研土器の出現が知られる。また、文様的には、手法、構成上、在地的な展開ないし朝鮮半島との関連が考えられる。すなわち、大汶口文化の影響は本質的に遼東半島の土器組成を一変させるものではなく、その影響を受けつつも、前代以来の系譜をひいているものと解せられる。

より山東の影響を受けるのは小珠山上層、双砬子1期、双砬子2期の段階である。双砬子<sup>⑨</sup>は分層発掘により1～3期に区分され、その分期は妥当と考えられる。問題は小珠山上層と双砬子1期との対応である。両者に相当する遺跡に於て層序的な論拠はないものの、双砬子1期における三環足器の消失と彩繪陶の出現という点に大きな違いがみられる。これらの差異は、山東における山東龍山文化から岳石文化とも対応する。と共に、両者の土器様相の違いは系譜的には継続的な変遷過程を示すと考える。従って、ここでは両者を区分して小珠山上層期と双砬子1期とし、連続的な二時期と考える。

さて、小珠山上層期(第四図27、40)は郭家村の層位によって呉家村期の延長上にあることが保証されている。しかし、その移行には大きな変化がみられる。その移行過程は郭家村3層に示されるが、系譜関係を辿るまでには至らない。呉家村期との大きな違いは、甕、三環足器、器蓋、高杯などの出現と共に黒陶や卵殻黒陶の存在にある。山東龍山文化の影響により成立したものと考えられる。これは前代の大汶口文化の場合と違い、土器組成としても山東龍山文化の範疇に入るものであり、山東との斉一性が認められる。一方、在地性を示す特徴もある。甕(同28・36)では、平行沈線文あるいは無文を特徴とする山東龍山文化のものに対し、遼東半島の場合は、平行沈線文と半截竹管状の斜線文、あるいは篋描ぎ状の



第4圖 遼東半島先史時代土器變遷圖(1) (縮尺 1/16)

綾杉文が主である。更に、口縁隆帯土器（同29・30）も在地的特徴を示すが、報告例が限られているため、系譜関係やその詳細は不明である。郭家村上層の例からみれば、口縁隆帯は多様であるものの、口縁隆帯に刻み目あるいは篋描き状斜線・斜格子文を持つものが大半である。同様に、上馬石西丘東南端崖出土のものもこの一群に属し、その形態は瀋陽地区の偏卜子類型<sup>⑩</sup>（第七図7～16）に類似している。また、胴部上半に隆帯を廻らしその下に文様を施す壺ないし甕も在地的性を示すと共に、瀋陽地区との類似性を表わしている。これに該当するものは郭家村上層（第四図27）、上馬石C地点のものにみられる。類似した文様形態として、胴部上半に刻み目隆帯を貼りその下に垂下隆帯と垂下沈線を施すものが文家屯B・C区に存在し、この時期に属する在地的な土器群と考える。ところで、郭家村上層には、盆形鼎の盛行や甑の出現と共に在地的な甕が見当たらない点、他の同時期の土器群に対して異質な要素を持っている。しかし、三環足器や卵殻黒陶の存在、半截竹管状工具による文様構成などを有する点からみて、明らかに小珠山上層期に属するものである。そこで、これを小珠山上層期内の時期差によるものか、あるいは遼東半島内での地域的違いとみるのかは、解釈の分かれるところである。今後、該期の一括遺物の検討にもとづく細分作業の進展を待つて再考したい。

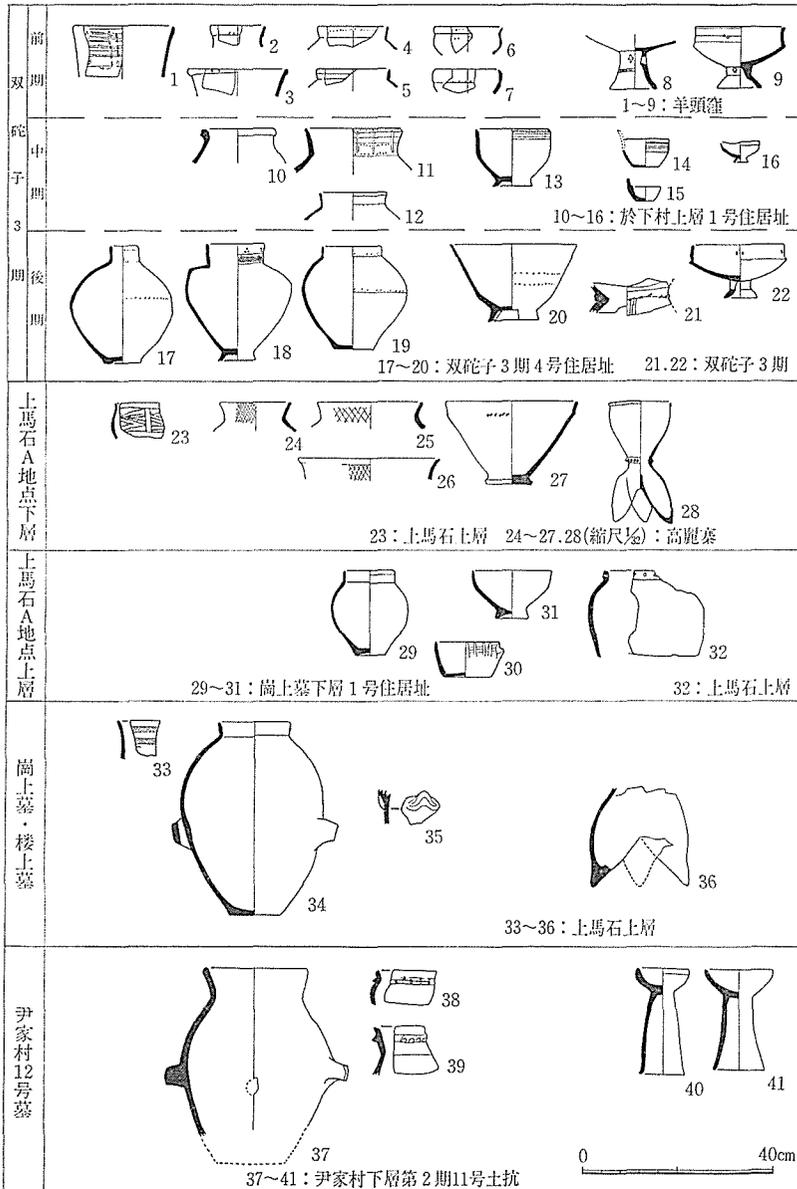
さて、この時期の年代的位置づけは山東龍山文化との対応によって為される。小珠山上層期の土器群はやや時期幅を持って存在しているところから直接の対比は難しい。この時期に含まれると考える四平山・老鉄山は墓葬という性格からも一括性が期待され、年代の一点を知り得よう。しかしながら、これらの資料は未発表のものが多いため、その詳細な位置づけを為し得ない。知られるものと言えば、四平山の鬚が高広仁の編年上、山東龍山文化前・中期にあたる。また、四平山の高杯や老鉄山1号積石墓6号石室の高杯<sup>⑪</sup>（第六図10）などは、呈子2期の前・中期に入るものであろう。更に小川静夫<sup>⑫</sup>が四平山の三足杯を以て呈子2期後期初頭以前とした様に、これらの墓葬土器群は山東龍山文化後期末にまで下るものではない。一応、小珠山上層期は山東龍山文化併行期とし、山東龍山文化後期末にまで下るものではないと考える。

続く双砵子1期（第四図41～53）は、壺、甕、高杯、碗、杯などからなり、黒陶系土器が主である。この内、甕は前代に

比べ口縁が直立気味に緩やかに外反し、型式学的変遷が辿れる。文様は簡素化の傾向を示し、平行沈線文に円形浮文あるいは無文のものが主である。これら山東龍山文化の系譜をひく土器群は、前代からの流れの上に立った変遷を示している。一方、前代にみられた在地系土器群は既報告資料には知られず、その存在は不明と言えよう。その意味で彩繪陶(同45、49)は在地性を示すものである。これは焼成後の黒褐色土器に赤・白・黄色を用いてV字形・三角形・菱形・階段形など幾何学図案を着色するものである。この系譜については、中原彩陶の亜流と見做す考え方と亜流黒陶に合流した櫛文的刻線文のもたらしめたものとする考え方が<sup>⑩</sup>ある。しいて彩陶との関連を考慮すれば、郭家村の例からして呉家村期以降まで当地域に彩陶が存続することから、その技法が退化して残存した時期に北方の幾何学文土器の影響によって彩繪陶が成立したと理解するのも可能であろう。

層位的に新しい双砬子2期は、山東の岳石文化・尹家城2期文化に類似し、ひき続いて山東の強い影響が知られる。口縁に受け部を持って段状をなす甗(同54・55)、尊形器(同58)、簋形器(同62)、器蓋(同63)などはその特徴を示すものである。また、折腹盆(同57)は遼西の夏家店下層前・中期との関連が示される。更に甗(同59)が新たに出現し、くびれ部に隆帯を貼る手法は山東・遼西にもみられると共に、続く時期に系譜的に繋がっている。以上の様に、双砬子2期は山東との関連の強さが示されるが、前代以来の在地的土器群の存在は知られない。年代的には岳石文化の下限が二里岡期以前とされる<sup>⑪</sup>ところから、それに従う。

この様に小珠山上層期～双砬子2期は山東の強い影響が知られた。山東は、この後、済南市大辛莊<sup>⑫</sup>にみられる様に、中原の殷文化の領域に属している。この殷文化の影響が山東半島の先端の烟台地区にまで達していたかは不明であるが、遼東半島は前代の系譜をひきながらも独自の展開を示し、山東の影響を脱したところに双砬子3期(第五図1～22)の特徴がある。これらは壺、甗、浅鉢、台付鉢、杯、高杯、甗などからなる。文様としては、平行沈線に刻みを入れたり、あるいはそれに棒状浮文を貼る施文法がみられ、この時期の特徴を為している。



第5図 遼東半島先史時代土器変遷図(2) (縮尺 1/16)

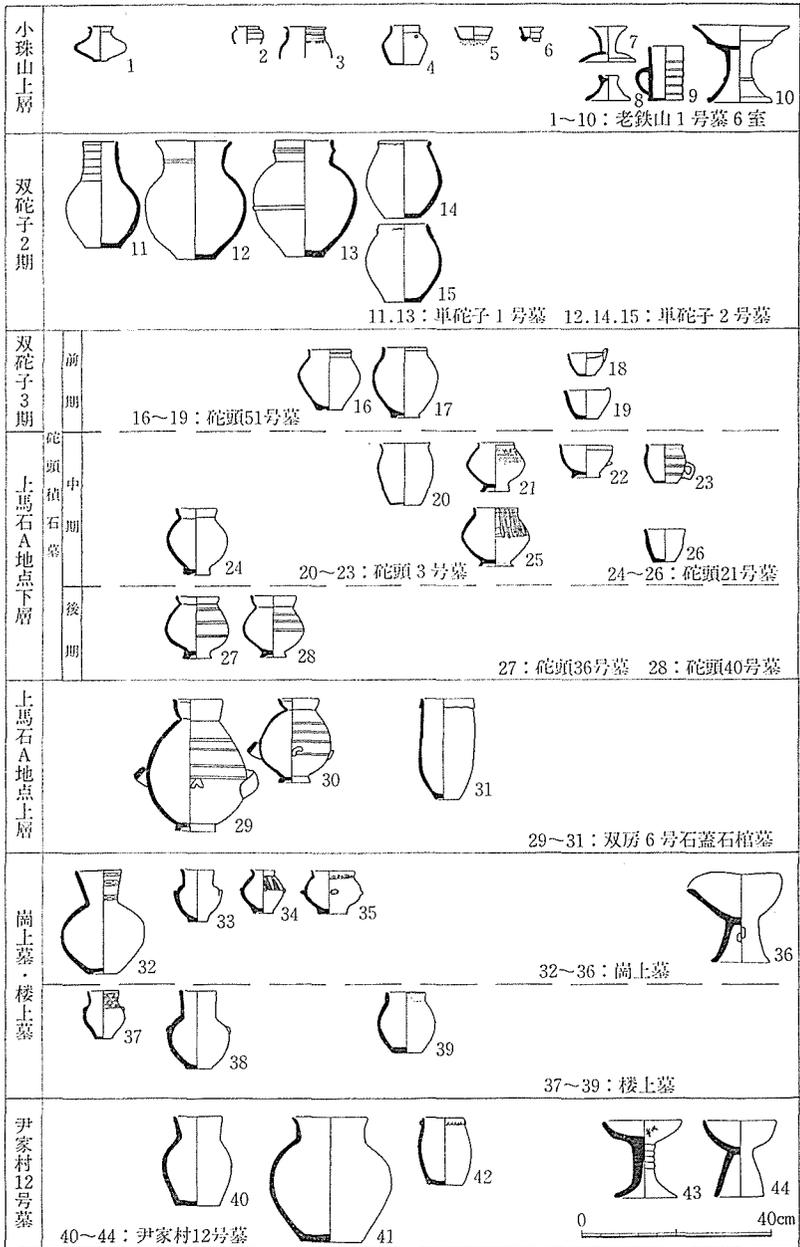
ここで当該期の細分を試みる。双砒子3期層では多数の住居址が知られ、切り合い関係により7↓4↓2号住居址の順で新しくなっている。これらは良好な一括遺物であるが、7・2号住居址ではそれぞれ一個体の土器しか認められず、細分案の基準たりえない。4号住居址では比較的多数の土器が認められるところから、これを双砒子3期層の代表的一括遺物とする。双砒子3期の特徴を持つ於家村上層<sup>②</sup>では1号住居址が良好な一括遺物である。同じく双砒子3期の特徴を示す羊頭窪<sup>③</sup>では一括遺物の存在が知られないが、器形や文様等にあまり種類差がないことから比較的まとまった時期のものであると判断する。これら三者の先後関係を示すことにより、当該期の細分案としたい。羊頭窪は双砒子1期の特徴である彩絵陶が残存している。また、他二者にみられない特異な十字形鏤孔を持つ高杯(同8・9)が存在する。一方、於家村上層1号住居址と双砒子4号住居址には、これまでみられなかった台付鉢(同13・20)が新たに出現している。よって古相を示す羊頭窪とそれ以外のものに先後関係が知られる。ついで双砒子4号住居址と於家村上層1号住居址を比較した場合、前者には列点文などの文様の簡素化と共に、これにつぐ時期に通有な口縁部の斜格子沈線文帯がみられるところから、前者は後者より新しいと考えられる。そこで羊頭窪↓於家村上層1号住居址↓双砒子4号住居址の順に先後関係を考え、この順に前・中・後期として双砒子3期を細別する。前期は、二里岡期以前とされる双砒子2期との対応と共に、特異な十字形鏤孔が中期の二里頭・二里岡期の土器にみられるところから、その時期に併行関係を考えるのが妥当であろう。遼西で言えば夏家店下層中期に相当し、この時期に遼西で彩絵陶が出現することも、前期まで彩絵陶が残存する妥当性を与えている。中・後期は台付鉢の存在からも、夏家店下層後期に初出する台付鉢(墓形器)の対応をもとにこの時期に相当すると考え、殷代後期にあたるとする。

許玉林が双砒子3期に続く時期とした上馬石上層<sup>④</sup>を中心とする土器群はかなりの年代幅を持っている。そこでこれらを細分すべく重要な資料がある。戦前の上馬石貝塚A地点の資料である。これは間層を挟んで明確に上・下層に分層されている。下層の口縁部にみられる斜格子文が上層では無文化ないし斜線文にみられる簡素化を示しており、上下層の土器群

の対比が知られる。一方、類似点はZ字形文や雷文を特徴とする幾何学文土器にある。Z字形文は上層に多少の退化性が見られ、その退化文様は瀋陽地区の鄭家窪子第三地点の壺(第七図21)の文様に一致し、年代の一点が知られる。この雷文は朝鮮北部から沿海州にかけて盛行する雷文と施文法で一致するが、文様単位は簡素化しており、雷文の最終型式と考える。この様な類似性からは上下層が比較的均一な時期のものであると判断される。さて、下層の口縁部斜格子文帯は双砮子3期後期に類似文様が見られるが、双砮子3期に通有な文様が下層にみられず、下層が双砮子3期後期より後出すると同時にそれに繋がるものと考えられる。ここに双砮子3期後期↓上馬石A地点下層↓上馬石A地点上層の順が知られる。一方、崗上墓<sup>②</sup>下層1号住居址(第五図29~31)は無文化を特徴とするところから上層土器群に属するものと考えられる。これにより、上馬石A地点上層は崗上墓より古い段階のものであることが想定できる。

今のところ、上馬石A地点以降の編年は、一括遺物として有効な墓葬編年に頼らなければならぬ。遼寧式銅劍の編年にもとづく変遷観は、崗上墓、樓上墓<sup>③</sup>、尹家村12号墓<sup>④</sup>の順である。そこで、これまで包含層・住居址単位で土器変遷を眺めてきたが、遡って編年作製上問題のある双砮子3期以降の墓葬土器変遷を明らかにし、墓葬土器編年上の上馬石A地点上・下層の位置づけを行いたい。それにより、前述した編年観の検証を行うと共に、双砮子3期以降の土器編年を確立したい。

於家村砮頭積石墓<sup>⑤</sup>は、双砮子2期併行と考えられる単砮子・双砮子墓葬と崗上墓・樓上墓の中間に位置するものである。これは58基の墓葬から成り立つが、墓葬出土の土器を一括遺物とみた場合、型式学的あるいは土器の組み合わせから3段階に細別が可能であり、これを前・中・後期とする。前期(第六図16~19)は甕の沈線文に刺突文を施す特徴がみられ、双砮子3期の特徴を示している。杯の特徴からすれば、双砮子3期中・後期に限定されるものである。砮頭中期(同20~26)には甕の口縁が開く傾向にあり、杯の把手の退化形態からみても前期より型式学的に新しいものである。新出の台付鉢は双砮子3期後期の台付部と形態を異にし、その系譜上にあるものと考えられる。但し、そこに見られる棒状浮文は双砮子3期



第6図 遼島半島先史時代墓葬出土土器変遷図 (縮尺 1/16)

の特徴であるが、崗上墓下層1号住居址にもみられるところから、新しい段階に残存してよいことになる。台付鉢自体は、台付部が次第に低くなる傾向にある。砦頭後期(同27・28)は胴部に沈線文を持つ壺に特徴があり、中期の壺の系譜をひいている。これらの土器変遷は、墓葬の築造順としても西から東へ動くことを示しており、妥当性を与えている。新金県双房6号墓の壺(同29・30)は砦頭後期の壺に型式学的に繋がり、所謂美松里型壺<sup>⑩</sup>に類似する。伴出する遼寧式銅剣は型式学的にみて崗上墓より古い段階のものである。先述した様に、上馬石A地点上層のZ字文壺が瀋陽地区の遼寧式銅剣墓を持つ鄭家窪子第三地点の壺に類似することは、上層が遼寧式銅剣を伴出する段階であることを物語っている。また、双房6号墓の壺の口縁が上馬石A地点上層の壺に類似している点を考慮すれば、双房6号墓は上馬石A地点上層期に含まれると考える。

この様な墓葬と包含層の併行関係を得た時、上馬石A地点の年代観はどうであろう。A地点下層は殷代後期の双砦子3期後期以降のものであり、上層に属する双房6号墓の遼寧式銅剣が春秋期に入るもの<sup>⑪</sup>と考えることから、上馬石A地点上層を春秋期、下層を西周期に対応するものと考え、各々を上馬石A地点上層期・下層期と設定する。

以上の様に、上馬石A地点上・下層期は前代以来の系譜上にあり、遼西や山東とは異なった独自性を示している。特に高が見い出されない点は、双砦子3期以来の遼東半島の独自性である。また、幾何学文土器も伴出しており、朝鮮北部との関係も知られる。一方、上層段階には遼寧式銅剣が成立しており、遼西の銅剣文化が伝播した時期と考える。

続く段階も、包含層単位の編年に比べ墓葬編年の方がより細別の意味をなす。共和国側が楼上墓段階とした尹家村1期<sup>⑫</sup>も、上馬石A地点上・下層期のものを含み年代幅を持っている。さて、この時期を崗上墓・楼上墓期として設定するが、土器組成全体の把握は難しい。崗上墓・楼上墓は銅剣からみて多少の時期差はあるものの、土器様相は類似している。無文のものが大半であるが、鋸歯状文を斜格子あるいは斜線で埋める文様(同34・37)や、長頸壺の頸部の斜格子文帯(同32)に特徴がある。また鞍状把手(同33)も盛行している。この墓葬編年の位置づけから、崗上墓・楼上墓期に対応する包含層

は上馬石BⅡ地点である。BⅡ地点は他時期の要素を示さないところから、この時期の比較的まとまった資料と言える。特徴的な壺の幾何学文帯や鞍状把手、無文化した甕などである。同様に橋状把手や柱状突起もこの時期にあってよいものである。甕も存在しており、くびれ部の隆帯もかなり退化している。この段階まで甕が存続していたことが知られる。更に口縁隆帯土器もみられるが、刻み目など文帯を施すものはほとんどない。前代の上馬石A地点上層期の無文化が一層顕著なものとなったと考えられる。なお、これら口縁隆帯土器の一部は甕の口縁部となっている可能性も強い。

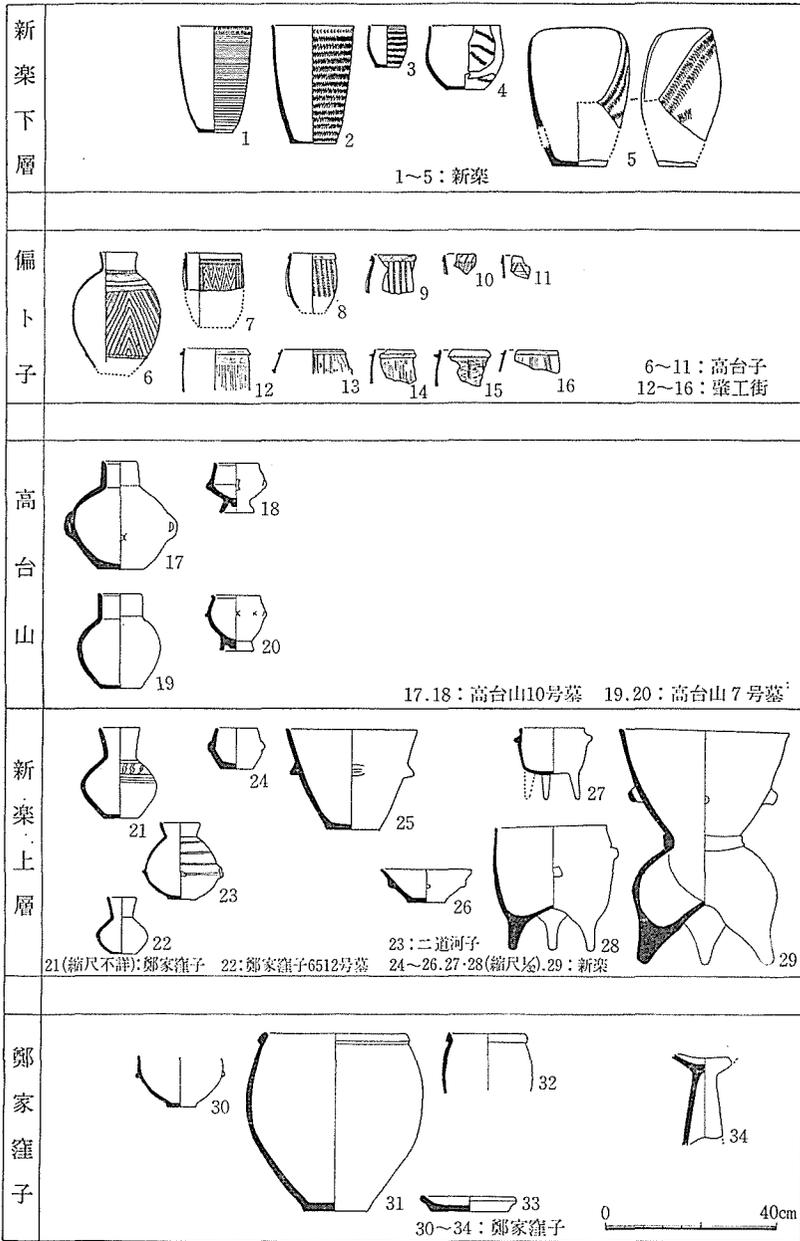
共和国側が尹家村下層1期に続くものとして尹家村下層2期<sup>⑤</sup>をあげている。これは大半が墓葬や土坑から成り立っているところから、この段階も墓葬編年に準拠する。良好な一括遺物である尹家村12号墓(同40~44)は、伴出する銅剣が楼上墓より後出する段階のものである。ここで、この墓葬を以て時期設定するならば、本期の特徴は把手を持つ大型甕(第五図37)や長脚化した高杯(同40・41)にある。また灰陶的形態を有する高杯(第六図43)は、燕・秦の流入時期にあたることを示すものと考え、当該期を戦国後期以降とする。

この様な崗上墓・楼上墓期から尹家村12号墓期にかけては、遼東半島の銅剣文化が独自の展開を行った時期として位置づけられよう。その年代は、崗上墓の銅剣を戦国前期と考えるところから、これらの時期を戦国期併行と考えるのが妥当と思われる。そして、尹家村12号墓期に於ては、徐々に中原文化の流入が顕在化しつつある時期として捉えられよう。

## (二) 瀋陽地区

編年作製上、根拠となりうる分層発掘が行われた遺跡として、瀋陽市新楽<sup>⑥</sup>と新民県高台子<sup>⑦</sup>があげられる。新楽は上・下層に、高台子は5・4・3層に文化層が分かれている。新楽下層は高台子5層に、新楽上層は高台子3層にほぼ対応するところから、新楽下層↓高台子4層↓新楽上層の順が層位序列を示すことになる。以下、各文化層の土器群の特徴を示すと共に、遼東半島編年との対応から、その位置づけを行う。

中国東北地方における先史土器の編年と地域性（宮本）



第7図 瀋陽地区先史時代土器変遷図（空欄部分は、土器型式未確認部分，縮尺 1/16）

新築下層は、平底の円筒形深鉢に短幅連続弧線文を施す土器(第七図2~4)を主体としている。他に、器形としては斜口縁土器(同5)が、文様としては平行沈線文(同1)や、口縁直下に1列ないし2列の篋描き状短斜線文あるいは綾杉文を施すもの(同1・2)がある。胎土に滑石を含むものは僅かであり、紅褐陶が多い。以上の様に、新築下層は胎土や器種構成上やや差があるものの、器形上、文様上、遼東半島の小珠山下層期に類似している。特に、短幅連続弧線文は遼西のものと同施文具・施文法を異にしたもので、遼東半島との類似性を示すと共に、小珠山下層期との併行関係を示していると考えられる。

高台子4層は口縁隆帯と幾何学文を特徴とする土器群で、偏卜子類型(同6~16)と呼ばれている。この偏卜子類型は、他に新民県偏堡<sup>⑧</sup>の採集資料の一部や瀋陽市肇工街<sup>⑨</sup>のものにみられる。器種組成は深鉢・壺などからなる。深鉢は口縁隆帯や垂下隆帯、篋描き状の幾何学文に特徴がある。壺は頸部と胴部下半に刻み目隆帯を施し、その間を幾何学文で飾っている。偏卜子類型の位置づけについては、肇工街で高足あるいは瓶足が伴出することから、夏家店下層中期以降とする考え<sup>⑩</sup>方がある。しかし、伴出している遺物に遼東半島上馬石A地点上・下層期に属する新しい遺物が含まれており、高台子4層にはその種の新しい要素を含んでいないことから、根拠とした高足は新しい段階のもので、この考え方は成り立たない。遼東半島編年との対比によって時期を推定するならば、遼東半島小珠山上層期で在地系土器群とした深鉢の口縁隆帯や垂下隆帯あるいは壺・甕の頸部隆帯とその下を施文する手法に、偏卜子類型との相似性が認められ、この時期に併行するものと考えることが可能である。

新築上層(同21~29)は甗、鼎、甌、甗、壺、深鉢、高杯などからなる。夾砂紅陶や夾砂褐陶が主であり、文様としては少量の口縁隆帯が知られるぐらいでほとんど無文である。土器の質や組成あるいは無文である点から言えば、遼西の夏家店上層に属する土器群と考える。

ところで、新民県高台山墓葬<sup>⑪</sup>の土器(同17~20)は、新築上層の土器とやや様相を異にしている。墓葬と包含層を同等に

扱うわけにはいかないが、高台山墓葬区包含層の土器も同様に様相を異にしているところから、両者の比較は成り立つと考える。この墓葬からは壺と台付鉢がセットで出土する場合が多い。これら一括遺物を比較検討すれば、双耳壺から無耳壺へ、台付鉢の台付部が退化する方向への変化が想定できる。これらの変化や台付鉢の形態は、遼東半島上馬石A地点下層期の花頭積石墓中・後期に併行すると考えられる。新樂上層は後に述べる遼西の夏家店上層と類似し、同一土器群と見做すものである。その年代が主として春秋期を対象とするものであることから、新樂上層は遼東半島上馬石A地点上層期に併行することになる。そうしてみれば、高台山は新樂上層に先行するものと位置づけられる。新樂上層併行と考える瀋陽市鄭家窪子第三地点・六五二一號墓<sup>①</sup>の壺(同21・22)は、この高台山の壺から系譜的に繋がったものと思われる。また、新樂上層には、双房6号墓の壺に類似した所謂美松里型壺<sup>②</sup>(同23)が伴うことが、遼東半島編年から考えられる。

新樂上層につぐものとしては、瀋陽鄭家窪子包含層<sup>③</sup>の土器群(同30~34)があげられる。壺、甕、高杯などから成り立つ。高脚の高杯の形態は遼東半島尹家村12号墓期併行を示している。その下限年代は、戦国後期墓<sup>④</sup>に見られる燕文化の浸透によって知られ、戦国後期と考える。

以上の様に、瀋陽地区の土器様相は遼東半島と類似し、密接な関係を示している。必ずしも遼東半島編年とすべてが対応しているわけではないが、瀋陽地区と遼東半島は全時期を通じて相互に関連性を保ち続けているところから、両地域を遼東としてまとめて同一土器地域圏と見做すことは可能であろう。その意味で、これら地域と類似性を示す西北朝鮮について検討する。

### (三) 西北朝鮮

鴨緑江流域から清川江流域にかけての西北朝鮮は、平底深鉢からなる土器群であることから、椽の実形深鉢を特徴とする西朝鮮の土器群と大きく異なる。無文土器段階では、鴨緑江上流域と下流域とに地域差が設定されているが、それ以前<sup>⑤</sup>

の段階では明確な差が知られないため、両者を同一地域として検討する。

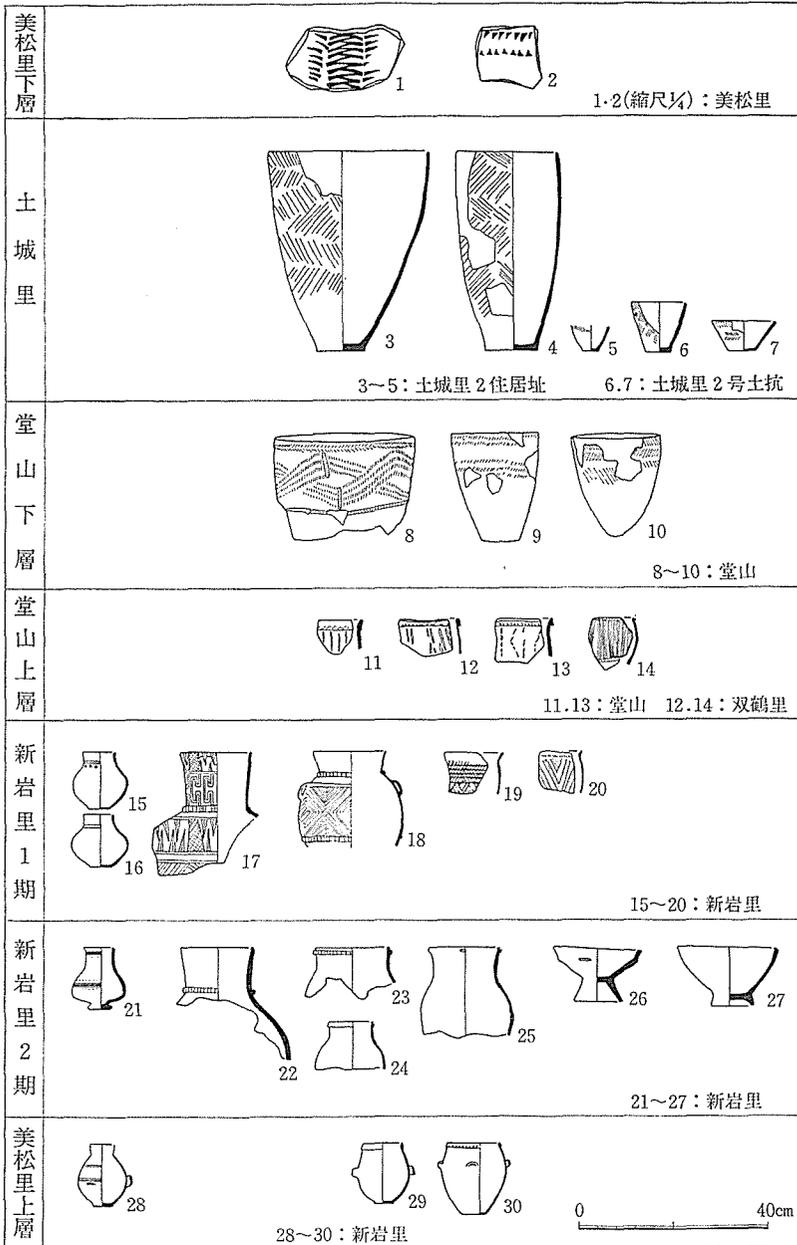
従来この地域を三つの土器群を以て先後関係を示そうという考え方がある。美松里↓土城里↓新岩里の順である。美松里・土城里は文様の種類差があるものの、胎土に石綿や滑石を混入することに関連がある。土城里・新岩里は胎土に差があるものの、文様に類似性がみられる。以上がこの先後関係の根拠である。一方、遼東半島の土器変遷をもとに、美松里下層・堂山↓新岩里1↓双鶴里2↓新岩里2の順が考えられている<sup>⑦</sup>。両者の考え方は基本的には矛盾しないものと思われる。さて、この地域での層位的発掘例は皆無に等しいところから、後者の説の方法、すなわち関係の深い遼東半島土器編年をもとに土器変遷を決定する方法を取らざるをえない。もちろん、そこでは前者の説の様に、土器群相互の比較による先後関係を踏まえたものである。

この地域最古と思われる土器は、従来言われた様に、平安北道義州郡美松里下層<sup>⑧</sup>にある。これは遼東半島小珠山下層期の特徴を示す短幅連続弧線文土器（第八図1・2）である。

遼東半島吳家村期は平安北道定州郡堂山<sup>⑨</sup>の一部があたる。特徴的な短斜線文列（同9）や、短斜線文もしくは押し引き短斜線文からなる幾何学状文（同8）の存在がそのことを示している。また伴出する丹塗磨研土器も吳家村期の特徴をなす。それ故、堂山をこの時期の標準遺跡としたい。但し、堂山は異なる時期の二つの具層から成っており、区別する必要がある。ところが、その層位は混乱しており、分層発掘は為されていない。区画帯を設けその中を斜線で埋める雷文系の幾何学文や、刻み目を持つ口縁隆帯の直下を縦列の刻線・直線が数条施される土器群（同11・14）は、吳家村期より新しい小珠山上層期に相当するものと考ええる。そこで、遼東半島吳家村期併行のものを堂山下層、遼東半島小珠山上層期併行のものを堂山上層と名づけて区別する。

ところで、慈江道中江郡土城里<sup>⑩</sup>の位置づけが問題となろう。これは鉄器時代まで続く複合遺跡であり、主体をなす魚骨文系土器の他、口縁隆帯や雷文系幾何学文を持つ遼東半島小珠山上層期以降に併行する土器もみられる。魚骨文系土器は

中国東北方における先史土器の編年と地域性 (宮本)



第8図 西北朝鮮先史時代土器変遷図 (縮尺 1/16)

胎土に滑石・石綿を含むところから、遼東の例からしても古い時期に位置づけられる可能性がある。この内、一括性が期待される土城里2号住居址出土の土器群を標準とする。これは篋描き状魚骨文と三角集線文を組み合わせた平底深鉢(同3・4)や、櫛齒状直線文の平底深鉢(同5)、そして列点文土器片からなるものである。他に同類型として魚骨文の浅鉢(同7)があげられる。平底深鉢の文様構成は、遼東半島小珠山中層期にみられる深鉢と類似している。また、胎土に滑石を混入する例からみても、土城里を小珠山中層期に併行するものと考えたい。但し、共和国側は土城里をかなり新しい段階のものと見做すが、これは雷文系幾何学文の存在をもととした議論と思われる。先述した様に、幾何学文土器を遼東半島小珠山上層期以降のものと考え、住居址の一括遺物からもそれが魚骨文系土器と共伴するものとは考え難いため、共和国側の見解は成り立たないと思われる。さて、土城里の土器は東北朝鮮・西朝鮮に類似した文様である。そこで、この土器群を堂山下層に比べ在地的特色の強いものと見做すこともできる。ところが、遼東半島の小珠山中層の場合、この型式の土器が67%を占めることから、遼東半島で客体的存在を示してはいない。ここに、これらの土器をこの時期の遼東から西北朝鮮への通有な土器群と認めたい。それにより、美松里下層、土城里、堂山下層の土器変遷は、遼東半島と歩みを同じくしていることになる。同時に、土城里対応の瀋陽地区の様相は不明であるものの、瀋陽地区を含める遼東との広範な類似性が知られるのである。

この様な遼東一円との類似性は続く時期にもみられる。遼東半島小珠山上層期は堂山上層・双鶴里<sup>㉑</sup>などが併行している。遼東の在地的特徴を示す口縁隆帯とその直下に縦走の直線文などを施す土器(同11・14)である。

問題となるのは新岩里1期<sup>㉒</sup>の幾何学文土器の位置づけである。そこにみられるV字の区画帯を重ね区画帯内を斜線で埋める幾何学文(同20)は、瀋陽偏卜子類型に存在する。また、壺・甕(同17・18)にみられる様な頸部に刻み目隆帯を設けその下に文様帯を置く文様構成は、小珠山上層期・偏卜子類型の在地系土器群に一致している。ところで、一對の堅形橋状耳を持つ壺・甕の器形は、この時期の遼東では知られない。また、これらの幾何学文は所謂雷文系幾何学文に類似するが、

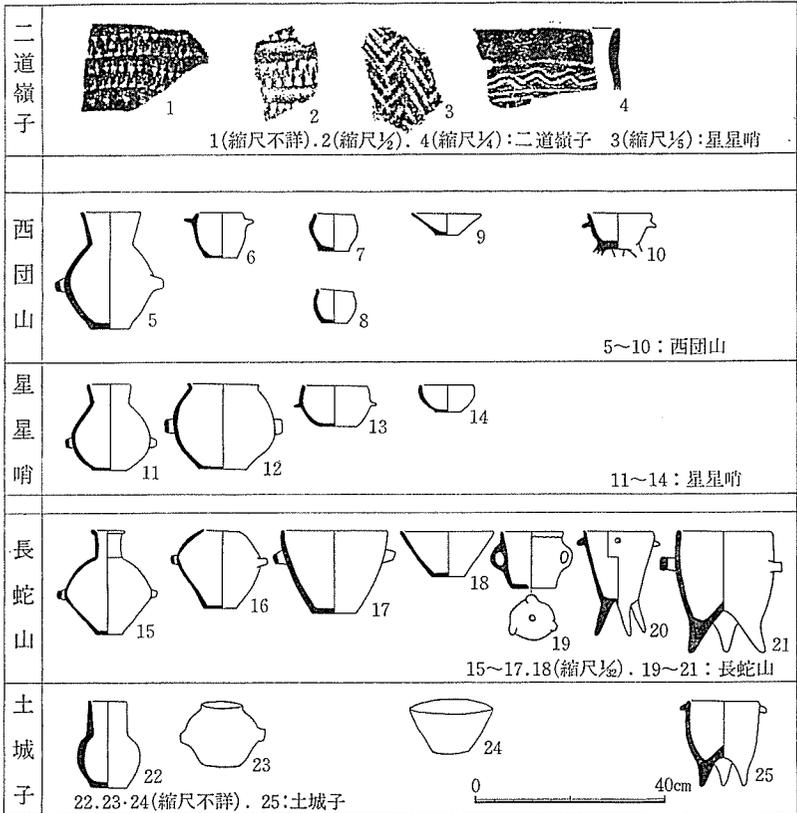
区画帯からなるのみでその内部を斜線で埋めることはない。これらの異質な要素は、時期的に新しい傾向を示すものとも解せる。新岩里1期の内、第三地点<sup>②</sup>のものはやや異なった傾向を示し、彩絵陶の存在を以て双砵子1期、下つても双砵子3期前期段階にあたるものと考えられる。また、口縁隆帯深鉢を持つ堂山上層と比較すれば、新岩里1期には口縁隆帯深鉢を含まず、堂山上層より後出するとも言える。新岩里1期に伴出する平行沈線文の壺(同15・16)は双砵子2期のものに相似していることを考慮して、堂山上層を小珠山上層に併行、新岩里1期を双砵子1期から双砵子3期にかけてのものとする。

続く新岩里2期<sup>③</sup>の内、口縁に4個の突起を付ける壺(同25)や、無文で頸部に刻み目隆帯をもつもの(同22)は、遼東半島上馬石A地点下層期併行の瀋陽高台山墓葬区文化層<sup>④</sup>のものと類似する。また、口縁刻み目隆帯の壺(同23・24)は、上馬石A地点上層の壺に類似している。新岩里2期は、新岩里1期より後出することからみても、遼東半島上馬石A地点上・下層に併行するであろうと想像される。遼東半島上馬石A地点上層以降に併行する美松里上層(同28・30)より、新岩里2期が古いと考えることは、この新岩里2期の位置づけとも符合している。

以上の様に、堂山上層から新岩里2期・美松里上層にかけても、遼東半島、瀋陽地区、西北朝鮮における類似性がみられ、初段階以降、その地域圏は崩壊していないと言えよう。

#### (四) 吉長地区

張忠培は吉林市近郊の遺跡を土器を中心として三つの文化段階に位置づけている<sup>⑤</sup>。この内、文化2は西団山から土城子に至る土器群を包括している。文化3は発掘資料がなく詳細は不明であるが、文化2より胎土が荒く、多孔甌や高杯を伴うところから、文化2につぐものと考えてよからう。問題となるのは文化1の帰属である。文化1は二道嶺子・碾磨山などが該当する。平底土器で、短幅連続弧線文(第九図1・2)、篋描き波状文(同4)魚骨文(同3)などが施文される。この



第9図 吉長地区先史時代土器変遷図 (空欄部分は土器型式未確認部分, 縮尺 1/16)

内、短幅連続弧線文は新築下層や遼東半島小珠山下層期のものと同様であり、遼西地区の長幅連続弧線文とは異なっている。よって文化1の短幅連続弧線文系の土器群を吉長地区最古の土器群と把握しうる。また、魚骨文は朝鮮半島ないし遼東半島小珠山中層期以降の魚骨文系文様帯と類似している。なお、文化1の他の土器に関してはその位置づけが今のところ不可能である。

一方、文化2内では西団山から土城子までの編年がなされている。これは遺跡を一単位として、伴出する青銅器などをもとに先後関係を決定したものである。その先後関係とは、西団山↓星星哨<sup>㊦</sup>↓騷達溝↓長蛇山<sup>㊦</sup>・猴石山<sup>㊦</sup>↓土城子の順である。全資料が報告されているわけではないが、第九図に示す様に、西団山的美松里型壺と星星哨での

その退化形態、長蛇山での鬲・单孔甑の成立、土城子での甑の多孔化ならびに高杯の一般化という変遷が見取れる。これら一連の遺跡は系譜関係が明瞭であり、比較的まとまった時期のものである。西团山の位置づけについては、遼東半島上馬石A地点上層の双房6号墓の壺と関連づけてその時期に併行を考える<sup>10)</sup>。遼陽二道河子石棺墓に類似した銅剣を持つ星屋哨はそれよりやや下るものである。長蛇山は銅矛・銅斧の型式から戦国中期に位置づけ、長蛇山と土城子を戦国後半と考える。よって吉長地区への鬲の流入は瀋陽地区より遅れることになる。以上、文化2は遼東半島上馬石A地点上層期へ尹家村12号墓期併行とし、文化1とは編年上大きな隔たりを持っている。

この様に、吉長地区は編年的に欠落している部分を残しながらも、大勢では遼東と同一な歩みを為している。ただ文化2の動きは遼西との関連の強さを示し、青銅器を伴う遼西の影響力の伸長が知られ、画期を為す段階である。が、その直前まで知られる美松里型壺などの遼東として共通な在地的様相は、吉長地区を含めて遼東と捉えることを可能にしている。

① 遼寧省博物館・旅順博物館・長海県文化館「長海県広鹿島大長山島貝丘遺址」(『考古学報』一九八一年第一期)。

② 前掲注①文獻。

③ 許玉林・蘇小辛「略談郭家村新石器時代遺址」(『遼寧大学学报』一九八〇年第一期)。遼寧省博物館・旅順博物館「大連市郭家村新石器時代遺址」(『考古学報』一九八四年第三期)。

④ 山東省博物館「談談大汶口文化」(『文物』一九七八年第四期)。

⑤ 伍人「山東地区史前文化發展序列及相關問題」(『文物』一九八二年第一期)。

⑥ 山東省博物館「山東蓬萊紫荆山遺址發掘簡報」(『考古』一九七三年第一期)。

⑦ 丹東市文化局文物普查隊「丹東市東溝泉新石器時代遺址調查和試掘」(『考古』一九八四年第一期)。

⑧ 澄田正一「遼東半島の先史遺跡」(『樞原考古学研究所論集』第四一

九七九年)。なお、文家屯貝塚の発掘はA・B・C区に分けて為されている。

⑨ 朝中共同発掘隊「中国東北地方の遺跡発掘報告」一九六六年

⑩ 前掲注⑨文獻。日本学術振興会による上馬石貝塚の発掘は、この他にA・B・C・D地点に分かれて為されている。今後、地点名を示した上馬石貝塚の資料は、日本学術振興会によるものを指す。

⑪ 瀋陽市文物管理弁公室「新民高台子新石器時代遺址和墓葬」(『遼寧文物』一九八一年第一期)。

⑫ 高広仁・郡望平「史前陶器初論」(『考古学報』一九八一年第四期)

⑬ 旅大市文物管理組「旅順老鉄山積石墓」(『考古』一九七八年第二期)

⑭ 小川静夫「極東先史土器の一考察」(『東京大学文学部考古学研究室研究紀要』第一号 一九八二年)。

⑮ 三宅俊成「東北アジア考古学の研究」一九七五年。

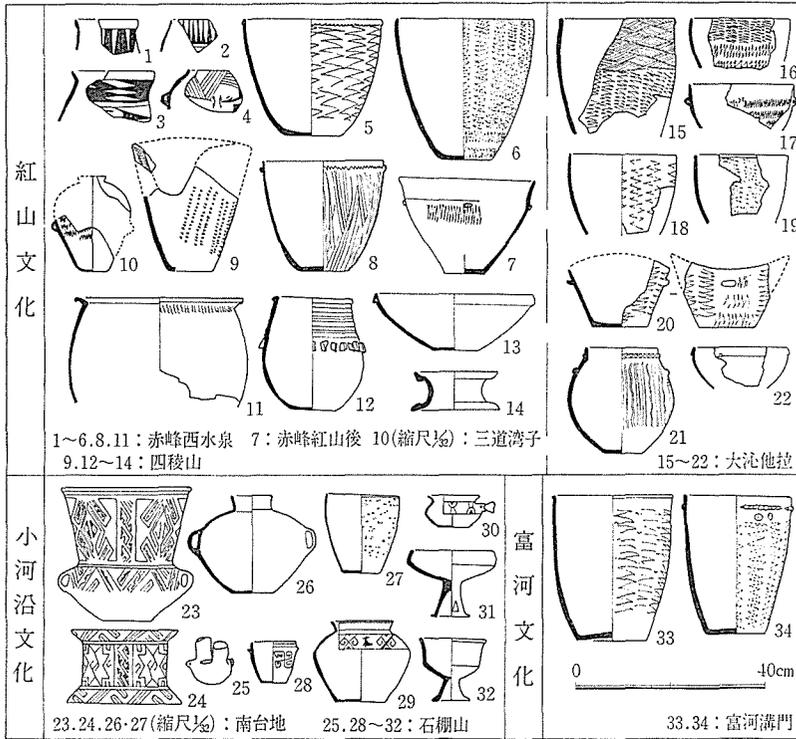
⑯ 澄田正一「中国先史文化」一九四八年。

- ①⑦ 趙朝洪「有闕岳石文化的幾個問題」(『考古与文物』一九八四年第一期)。
- ①⑧ 秦鳳書「濟南大辛莊商代遺址的調查」(『考古』一九七三年第五期) 前掲注⑨文獻。
- ①⑨ 前掲注⑨文獻。
- ②⑩ 旅順博物館・遼寧省博物館「旅順於家村遺址發掘簡報」(『考古學集刊』一九八一年)。
- ②① 金閔丈夫・三宅宗悦・水野清一「羊頭窪」(『東方考古學叢刊乙種第三冊』一九四二年) 前掲注①文獻。
- ②② 前掲注①文獻。
- ②③ 靳楓毅「論中國东北地区含刃青銅短劍的文化遺存(上)(下)」(『考古學報』一九八二年第四期・一九八三年第一期)。
- ②④ 前掲洋⑨文獻。
- ②⑤ 前掲注⑨文獻。
- ②⑥ 前掲注⑨文獻。
- ②⑦ 前掲注⑨文獻。
- ②⑧ 旅順博物館・遼寧省博物館「大連於家村花頭殺石墓地」(『文物』一九八三年第九期)。
- ②⑨ 玉許林・許明綱「新全双房石棚和石蓋石棺墓」(『文物資料叢刊』七一九八三年)・許明綱・許玉林「遼寧新金泉双房石蓋石棺墓」(『考古』一九八三年第四期)。
- ③① 金用珩「美松里洞窟遺跡發掘中間報告(一)(二)」(『文化遺產』一九六一年第一号・第二号)。
- ③② 前掲注③文獻。
- ③③ 前掲注③文獻。
- ③④ 前掲注③文獻。
- ③⑤ 『史記』卷一一〇匈奴列伝にみられる遼東郡の設置記事は、戦国後期段階に燕が遼東まで版図を広げたことを示している。また、遼東半島の庄河県からは「相邦春平侯」銅劍が出土している。旅順博物館報導組「旅大地区発見趙国銅劍」(『考古』一九七三年第六期)。これは趙国の銅劍であるが、黄盛璋「試論三晋兵器的国別和年代及其相關問題」(『考古學報』一九七四年第一期)によれば、銘文から孝成王(B.C.二六五～二四四年)代とする説が有力である。別に新金泉後元台石棺墓からは、魏の安熹王二年(B.C.二五六)とされる「啓封」戈が出土している。許明綱・於臨祥「遼寧新金泉後元台発現銅器」(『考古』一九八〇年第五期)。中原文化が流入した資料と考える。
- ③⑥ 瀋陽市文物管理弁公室「瀋陽新樂遺址試掘報告」(『考古學報』一九七八年第四期)。
- ③⑦ 前掲注①文獻。
- ③⑧ 東北博物館文物工作队「遼寧新民原備堡沙崗新石器時代遺址調査記」(『考古通訊』一九五八年第一期)。
- ③⑨ 前掲注①文獻。
- ③⑩ 前掲注①文獻。
- ④① 新民県文化館・瀋陽市文物管理弁公室「新民高台山新石器時代遺址一九七六年發掘簡報」(『文物資料叢刊』七一九八三年)。瀋陽市文物管理弁公室「瀋陽新民原高台山遺址」(『考古』一九八二年第二期)。
- ④② 瀋陽故宮博物館・瀋陽市文物管理弁公室「瀋陽郷家窪子の兩座青銅時代墓葬」(『考古學報』一九七五年第一期)。
- ④③ 瀋陽地区で美松里型壺に類似した土器を持つ遺跡は、前掲注④①文獻以外に以下の報告がある。
- ④④ 遼陽市文物管理所「遼陽二道河子石棺蓋」(『考古』一九七七年第五期)。
- ④⑤ 遼原県文化局「遼寧清原門險石棺墓」(『考古』一九八一年第二期)。清原県文化局・撫順市博物館「遼寧清原県近年発現一批石棺墓」(『考古』一九八二年第二期)。撫順市博物館考古隊「撫順地区早晚兩類青銅文化遺存」(『文物』一九八三年第九期)。

- ④③ 前掲注⑨文献。
- ④④ 金殿七「瀋陽市南区發現戰國墓」(『文物』一九五九年第四期)。
- ④⑤ 後藤直「西朝鮮の「無文土器」について」(『考古学研究』第一七卷 第四号一九七一年)。
- ④⑥ 李柄善「鴨綠江流域의 古文化의 繼承性에 對한 若干의 考察」(『考古民俗』一九六五年第二号)。
- ④⑦ 社会科学院考古研究所・歴史研究所「紀元前千年紀前半期の古朝鮮文化」(『考古民俗論文集』第一輯一九六九年)。
- ④⑧ 前掲注⑩文献。
- ④⑨ 都宥浩「朝鮮原始考古学」一九六〇年。
- ④⑩ 李柄善「中江郡土城里原始古代遺跡發掘中間報告」(『文化遺産』一九六一年第五号)。
- ④⑪ 鄭燦永「鴨綠江・禿魯江流域高句麗遺跡發掘報告」一九八三年。
- ④⑫ 社会科学院考古学研究所「朝鮮考古学概要」一九七七年。
- ④⑬ 前掲注⑭文献。
- ④⑭ 李順鎮「新岩里遺跡發掘中間報告」(『考古民俗』一九六五年第二号)。
- ④⑮ 新岩里第一・第二文化層をここでは新岩里1期・2期と呼称する。
- ④⑯ 金用珩・李順鎮「一九六五年度新岩里遺跡發掘報告」(『考古民俗』一九六六年第三号)。
- ④⑰ 前掲注⑮文献。
- ④⑱ 前掲注⑯文献。
- ④⑲ 張忠培「吉林市郊古代遺址的文化類型」(『吉林大学社会科学学报』一九六三年第一期)。
- ④⑳ 吉林大学歴史系文物陳列室「吉林西团山子石棺墓發掘記」(『考古』一九六〇年第四期)。
- ④㉑ 東北考古發掘團「吉林西团山石棺墓發掘報告」
- (『考古学報』一九六四年第一期)。
- ④㉒ 吉林省博物館「吉林江北土城子古文化遺址及石棺墓」(『考古学報』一九五七年第一期)。
- ④㉓ 董学增「吉林市郊三道嶺子、虎頭砬子新石器時代遺址調查」(『文物』一九七三年第八期)。
- ④㉔ 前掲注⑰文献。
- ④㉕ これら西团山文化の編年案は主として以下の三つのものがある。(a) 薛虹「嶺嶺和西团山文化」(『吉林師範大学学报』(社会科学版)一九七九年第一期)。(b) 吉林省文物工作队「吉林長蛇山遺址的發掘」(『考古』一九八〇年第二期)。(c) 董学增「試論吉林地区西团山文化」(『考古学報』一九八三年第四期)。これら三者の編年観は基本的には一致している。ここではより細かな編年観を示している(b)案を採用している。
- ④㉖ 吉林市文物管理委員会・永吉星星哨水庫管理处「永吉星星哨水庫石棺墓及遺址調查」(『考古』一九七八年第三期)。
- ④㉗ 前掲注⑱(b)文献。
- ④㉘ 吉林地区考古短訓班「吉林嶺石山遺址發掘簡報」(『考古』一九八〇年第二期)。
- ④㉙ 双房6号墓の壺より口縁が立ち上がり、型式学的には新しい傾向を示している。なお董学增(前掲注⑳(c)文献)は、西团山・星星哨を西周まで引き上げようとするが、これは星星哨のBC年代三〇五±一〇〇(B.C. 1105±100年)を根拠とするもので、問題がある。
- ④㉚ 靳楓毅(前掲㉑注文献)は、伴出した銅矛を鄒王職の銅矛と一致するとして戦国中期から戦国中後期前後としたが、鄒王職の銅矛とはやや形態を異にする。長蛇山の銅矛は戦国後期段階の燕国銅器に一致例がみられないところから、長蛇山を一応戦国中期段階とする。

連続した文化層を示す遺跡に、赤峰市蜘蛛山<sup>①</sup>、昭烏達盟敖漢旗南台地<sup>②</sup>がある。前者は、紅山文化↓夏家店下層文化↓夏家店上層文化↓戦国↓漢初、後者は小河沿文化↓夏家店下層文化の層序が明らかとなっている。夏家店下層文化以前では、紅山文化と小河沿文化の先後関係が問題となろう。両者は分布範圍をほぼ重ねることから、同時期の地域圏を異にしたものとみることができない。紅山文化(第一〇圖1~22)の年代は、赤峰市西水泉<sup>③</sup>では、彩陶文様の比較から仰韶後岡類型に併行するとされる。また、昭烏達盟敖漢旗四稜山<sup>④</sup>からは、紅山文化に伴って、中原の半坡早期のものに類似した円底罐<sup>⑤</sup>(同12)、仰韶廟底溝類型のものに類似した器座(同14)と圈足碗が出土している。これらを総合すれば、半坡早期↓廟底溝期にかけてのものであると推定される。一方、同じく彩陶を伴う小河沿文化(同23~32)はどうであろう。山東の大汶口文化との比較から、有孔石鏟、單刃石鏟、高杯の鏤孔、台付鉢、彩陶文様、石環、埋葬習俗、原始図象文字符号などの類似をもとに、大汶口文化中期に相当するという見解がある。河南省鄭州大河村3期<sup>⑥</sup>では、大汶口文化中期後半のものが共伴しており、仰韶文化後期の王灣2期早期にあたる。小河沿文化と大汶口文化との併行関係が正しいとすれば、先の紅山文化と中原の併行関係上、小河沿文化は紅山文化の後に来るものとなる。また、両文化を比較した場合、器種構成の増加などによって、小河沿文化の方が新しい傾向を示していることが一般的に認められている。

さて、彩陶・紅陶・粗質陶からなる紅山文化の内、粗質陶について遼東との対比から検討してみよう。遼東と同じく、施文原体の両端を相互に支点としてジグザグを施すロッカーパターンがみられる。遼東に比べ施文原体が幅広く、ジグザグ変換の間隔が広い(第二圖)。施文原体には数種類があるが、主として、弧状を呈するものと、直線を為すものに分かれ、各々が櫛歯状のものとならないものとに分かれる。直線を為すものは弧状のものに比べ、施文原体端部の押さえが軽く、ジグザグ変換の度に器面に対して施文具をやや離し気味に押圧したものと考える。他に紅陶にみられるものはこれらとは



第10図 遼西地区先史時代土器変遷図 (1) (縮尺 1/16)

異なり、より細線化した文様を施す。施文法として先に述べた違いと共に、ジグザグ変換の間隔、施文方向にも数種類がみられる。また、器形としては壺、深鉢、斜口縁土器があり、深鉢に限れば口縁に段を持つものと、そうでなくそのまま立ち上がるものに分かれる。口縁に段をもつもの(同7)は文様が限定されているが、それ以外の深鉢には別の数種類の文様が施される。これは良好な一括遺物や分層結果がないため、編年の細分が不可能であると共に、吉林省奈曼旗大沁他拉(同15・22)の様に地域差を持つ可能性もある。ともかく、これらのロッカーパターンが施文原体・施文法に於ても明らかに遼東のものと異なることから、長幅連続弧線文土器として遼東と区別して取り上げる。

さて、この種の長幅連続弧線文土器は中原の裴李崗・磁山でも出土している。器形

的には、河南省密県義溝北崗<sup>①</sup>の復元例の様に、紅山文化のものに類似している。施文原体としては典型的な紅山文化にみられない櫛齒状の直線的なものである。類似したものは、巴林左旗の発掘により、層位的に紅山文化より新しいとされる富河文化の深鉢<sup>②</sup>(同34)にみられる。詳細な観察ができないことから、この種の文様が編年の細分の根拠とならない。長幅連続弧線文に限れば、近年、中原と遼西を繋ぐ資料が出ている。河北省三河県孟各庄<sup>③</sup>である。上・下層に分層され、下層は孟各庄1期、上層は孟各庄2期として認識されている。この内、孟各庄2期を紅山文化に對比し1期を瀋陽地区の新樂下層に對比する考え方ががある。これは、紅山文化が仰韶文化後岡類型に併行する説をもとに、新樂下層の方が後岡類型より<sup>④</sup>年代的に古いという事実をひいたためである。しかしながら、孟各庄1期にみられるロッカーパターンは、遼西の長幅連続弧線文であり、遼東の短幅連続弧線文ではない。紅山文化は伴出遺物より半坡早期<sup>⑤</sup>廟底溝期にかけてのものであるから、孟各庄1・2期はこの段階に納まるものと考えられる。深鉢におけるロッカーパターンは、中原の方が併行関係からすれば古い段階から存在し、遼西の紅山文化、あるいはシラムレン河以北を中心に紅山文化以降に残る富河文化に、同種の施文原体と施文法が残存している。これらは明らかに遼東と施文原体・施文法を異にするものであり、遼東の短幅連続弧線文に対して、明らかに地域圏を異にして存在しているものである。斜口縁土器などにみられる様に、紅山文化と瀋陽地区の新樂下層は併行関係を以て存在していたと考えられる。また、新樂下層併行の小珠山下層は大汶口文化3期併行の小珠山中層より古いことから、仰韶文化中期より古いものであることが示され、年代的併行性を裏づけている。このことは遼西と遼東に於てロッカーパターンという同種の文様帯を有していることを示すものであるが、同時に、施文原体・施文法における差異が地域圏の違いを表わしている。

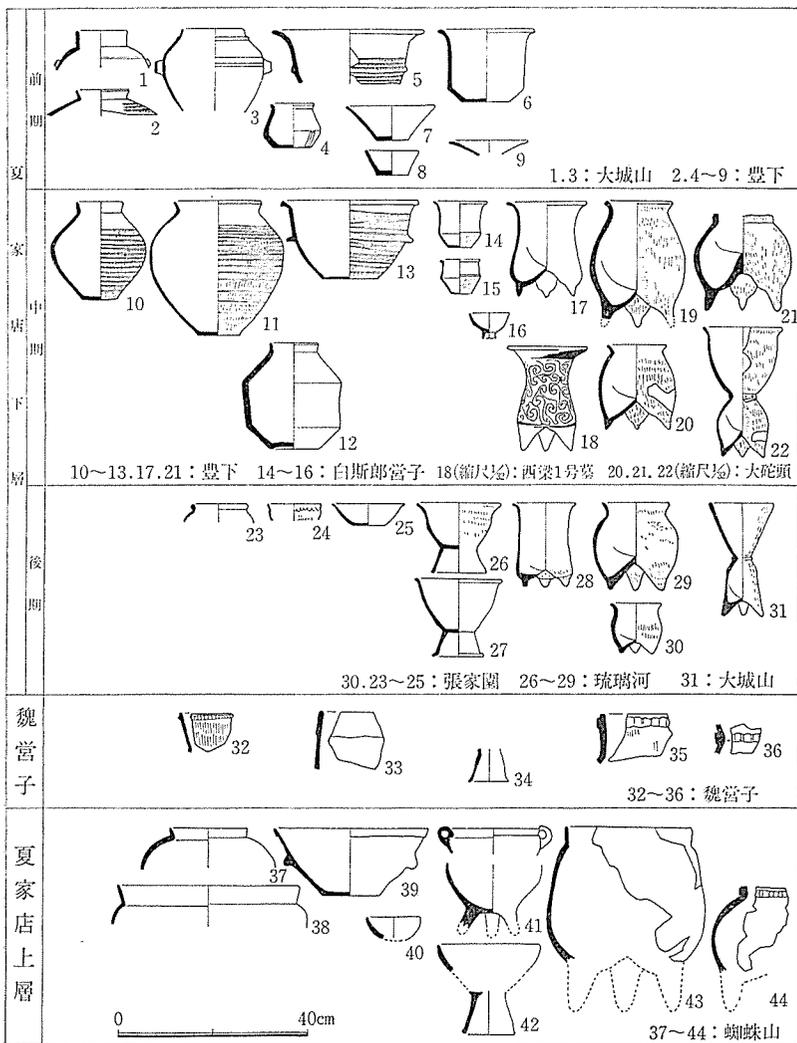
紅山文化から小河沿文化、そして層位的に後出する夏家店下層文化への推移は、系譜関係上うまく辿り難い。夏家店下層文化は遼西全域から河北の京津唐地区まで分布している。燕山以南と以北では多少の差異をみせているが、それらを一括して論を進める。李経漢<sup>⑥</sup>は、遼寧省北票県豊下<sup>⑦</sup>、天津市薊県張家園<sup>⑧</sup>などの層位関係から夏家店下層文化を3期に区分し

ている。豊下5層を前期、豊下2・3層を中期、張家園3層を後期とする。妥当と考えるので、その説をひき、中原・遼東との併行関係を示す。

前期(第一図1~9)は泥質黒陶の量比が高く、器形的には壺、甕、鉢、折腹盆、高杯などがみられ、鬲と甗はない。泥質黒陶である双耳壺(同1・3)、杯、折腹盆(同6)、高杯(同9)は龍山文化後期の様相を示し、この時期が龍山文化後期に併行すると考えられる。但し、これらの系譜を河南龍山文化あるいは山東龍山文化に求めるかは説の分かれるところで決し難い。<sup>⑩</sup>

中期(同10~22)は夾砂灰陶や夾砂紅褐陶が主流であり、壺、甕、鉢、皿、折腹盆(同14・15)、鬲(同17~20)、甗(同21・22)などがある。文様は主として繩蓆文であり、それに数条の平行沈線文を施すものもみられる。これらは文様・器形的に中原の二里頭・二里岡文化の土器に類似している。例えば、寧城県南山根出土の鉢や赤峰市葉王廟出土の腹部に多条の隆帯を持つ甕は、二里頭文化に類例が知られる。同じく河北省磁県下七垣との比較に於ても、その2層以下すなわち二里頭・二里岡文化に下層中期は併行しよう。また、鬲や甗の袋状の分檔部から棒状に足端が突き出る形態は二里岡文化のものに類似しており下っても殷後期の初段階に納まるものである。但し、二里頭・二里岡文化との違いは、それらに特徴的な埴や大口尊などが下層中期にないこと、あるいは下層中期には前期以来の折腹盆や在地的な鬲(同17・18)、彩絵陶(同18)が存在することにある。この様に中期は二里頭・二里岡文化に併行し、下っても殷後期初頭までのものと考ええる。また、それら中原との併行関係、あるいは折腹盆や彩絵陶の存在からすれば、遼東半島の双砬子2期~双砬子3期前期に対応するものと考えられる。なお、李絳漢は北京市房山県琉璃河1号墓<sup>⑪</sup>、河北省大廠回族自治県大坨頭1号灰坑<sup>⑫</sup>を中期に入れたが、鬲や甗の形態からみて殷後期段階に納まるべきものと考え、ここではこれらを後期に含める。

後期(同23~31)は泥質灰陶の量比が高まっている。繩蓆文が主体的文様であり、器種的には折腹盆が消失し、台付鉢(同26・27)が出現する。鬲・甗の尖り気味の足端部や鬲の口縁の開き方は、殷後期の特徴を示しており、併行関係が知ら



第11圖 遼西地区先史時代土器變遷圖(2) (縮尺 1/16)

れる。遼東半島で言えば、台付鉢の存在からも、双砬子3期中・後期併行が妥当であろう。

層位的に下層文化につぐのは夏家店上層文化である。近年、両者の間に魏營子類型を置く考え方があつた。朝陽県魏營子は墓葬であり、その構造や副葬品から西周前期とされる。客左県南溝門では魏營子類型が下層文化より層位的に新しいことが示されると共に、遼寧式銅剣を伴う墓葬によって切られている。また周初銅彝器を持つ穴蔵でも同種の土器が伴出している。<sup>②</sup> それらの土器(同32~36)は無文の紅褐陶が主であるが、繩蓆文を施すものもみられる。器種は鬲、鼎、甗、甗、鉢、高杯などである。特に鬲は口縁に隆帯を貼り付けるところに特徴がみられる。以上の様に、魏營子類型は夏家店下層文化と上層文化を繋ぐ段階として位置づけが可能であり、土器の系譜上、繩蓆文から無文への移行を示している。

夏家店上層文化(同37~44)は甗、鉢、高杯、鬲、鼎、甗などからなる。皆夾砂陶であり、焼成度が底く紅色や褐色を呈している。下層文化でみられた繩蓆文は完全に消失し、無文化している。口縁に隆帯を貼るものもあり、これを魏營子類型との系譜関係とみることもできよう。これらの土器群の年代は、遼寧式銅剣と共に西周後期~春秋前期の青銅彝器を伴出する寧城県南山根101号墓<sup>③</sup>が手掛かりとなる。ここから出土した銅容器と器形を同じくする土器が夏家店上層文化にみられ、この土器群の年代の一点がこの墓葬の副葬品の年代と一致すると考えられる。すなわち夏家店上層文化は遼寧式銅剣に伴う土器群である。その上限を西周の前・中期まで上げようとする考え方もみられるが、魏營子類型との関係あるいは南山根101号墓より西周後期以降と思われる。下限は蜘蛛山で層位的に示された様に、戦国灰陶の流入である。その年代は決め難いが、燕国の広がり結びつけて考えるならば、燕王銅戈の存在や、秦開による遼西郡の設置を根拠とし、戦国後期と考えられる。

① 中国社会科学院考古研究所内蒙古工作队「赤峰蜘蛛山遗址的发掘」

《考古学报》一九七九年第二期。

② 遼寧省博物館・昭烏達盟文物工作站・敖漢旗文化館「遼寧敖漢旗小

河沿三種原始文化的發現」《文物》一九七七年第二期。

③ 中国社会科学院考古研究所内蒙古工作队「赤峰西水泉紅山文化遗址」

《考古学报》一九八二年第二期。

④ 前掲注②文獻。

⑤ 嚴文明「半坡仰韶文化的分期与類型問題」《考古》一九七七年第三

- 期)によれば、この種の円底罐は半坡早期に属するとされる。
- ⑧ 李恭篤・高美璇「試論小河沿文化」(《中国考古学会第二次年会論文集》一九八〇—一九八二年)。
- ⑦ 鄭州市博物館「鄭州大河村遺址發掘報告」(《考古學報》一九七九年第三期)。
- ⑥ 朱鳳輝「吉林奈曼旗大沁他拉新石器時代遺址調查」(《考古》一九七九年第三期)。
- ⑤ 安志敏「裴李崗、磁山和仰韶」(《考古》一九七九年第四期)。
- ④ 河南省博物館・密原文化館「河南密原裴李崗新石器時代遺址」(《考古學集刊》第一集 一九八一年)。
- ③ 劉觀民・徐光冀「遼河流域新石器時代的考古發現与認識」(《中国考古学会第一次年会論文集》一九七九—一九八〇年)。
- ② 中国科学院考古研究所内蒙古工作队「内蒙古巴林左旗富河溝門遺址發掘簡報」(《考古》一九六四年第一期)。
- ① 河北省文物管理处・廊房地区文化局「河北三河縣孟各庄遺址」(《考古》一九八三年第五期)。
- ① 李経漢「試論夏家店下層文化的分類和類型」(《中国考古学会第一次年会論文集》一九七九—一九八〇年)。
- ① 遼寧省文物幹部培訓班「遼寧北票縣豊下遺址一九七二年春發掘簡報」(《考古》一九七六年第三期)。
- ① 天津市文物管理处「天津薊縣張家園遺址試掘簡報」(《文物資料叢刊》一九七七年)。
- ① 繩席文や方格文を持つ灰陶甕などからは、河南龍山文化の影響が考えられる。また、北京市文物考古隊「建国以来北京市考古和文物保護工作」(《文物考古工作三十年》一九七九年)によれば、河南龍山文化との関係が説かれる北京周辺の雪山第2期文化が、夏家店下層文化前

- 期に類似していることも、河南龍山文化との関係を示している。しかし、黒陶双耳壺は山東龍山文化に類似したものがみられ、河北省文物管理处「河北省三十年来的考古工作」(《文物考古工作三十年》一九七九年)によれば、河北省の北部沿岸は山東龍山文化の影響を受けているという説もある。
- ① 中国科学院考古研究所内蒙古工作队「寧城南山根遺址發掘報告」(《考古學報》一九七五年第一期)。
- ① 中国科学院考古研究所内蒙古工作队「赤峰葉王廟、夏家店遺址試掘報告」(《考古學報》一九七四年第一期)。
- ① 河北省文物管理处「磁山下七垣遺址發掘報告」(《考古學報》一九七九年第二期)。
- ① 中国科学院考古研究所遼寧工作队「敖漢旗大甸子遺址一九七四年試掘簡報」(《考古》一九七五年第二期)。
- ① 李殿福「吉林省庫倫、奈曼兩旗夏家店下層文化遺址分布与内涵」(《文物資料叢刊》七 一九八三年)に彩繪陶がみられる。また、夏家店下層文化に属するとされる北京市雪山遺址第3期文化にも彩繪陶が存在する。
- ① 北京市文物管理处・中国科学院考古研究所琉璃河考古工作队・房山縣文教局「北京琉璃河夏店下層文化墓葬」(《考古》一九七六年第一期)。
- ① 天津市文化局考古發掘隊「河北大廠回族自治县大坨頭遺址試掘簡報」(《考古》一九六六年第一期)。
- ① 遼寧省博物館文物工作队「遼寧朝陽縣魏營子西周墓和古遺址」(《考古》一九七七年第五期)。
- ① 省文物普查訓練班「一九七九年朝陽地区文物普查發掘的主要收穫」(《遼寧文物》一九八〇年第一期)。
- ① 前掲注②文献によれば、喀左縣海島營子窖藏、喀左縣北洞村窖藏の周辺にみられるとされる。熱河省博物館籌備組「熱河凌源縣海島營子村發掘的古代青銅器」(《文物參考資料》一九五八年第八期)。

文化局・朝陽地区博物館・遼寧省博物館・北洞文化発掘小組「遼寧略左原北洞村出土の青銅器」(『考古』一九七四年第六期)。

②⑦ 遼寧省昭烏達盟文物工作站・中国科学院考古研究所東北工作隊「寧城原南山根の石槌」(『考古学報』一九七三年第二期)。

②⑧ これは遼寧省林西県大井銅鋳夏家店上層文化冶鑄遺跡の14C年代をもとにした考え方であり、問題がある。遼寧省博物館文物工作隊「遼寧林西県大井古銅鋳一九七六年試掘簡報」(『文物資料叢刊』七一 一九八三年)。

②⑨ 燕王銘の青銅武器は多数存在するが、出土地の知られるもので遼西出土のものには、北票県東官營子出土の燕王職戈がある。燕王職については、張震沢「燕王職戈考釈」(『考古』一九七三年第四期)の公子職

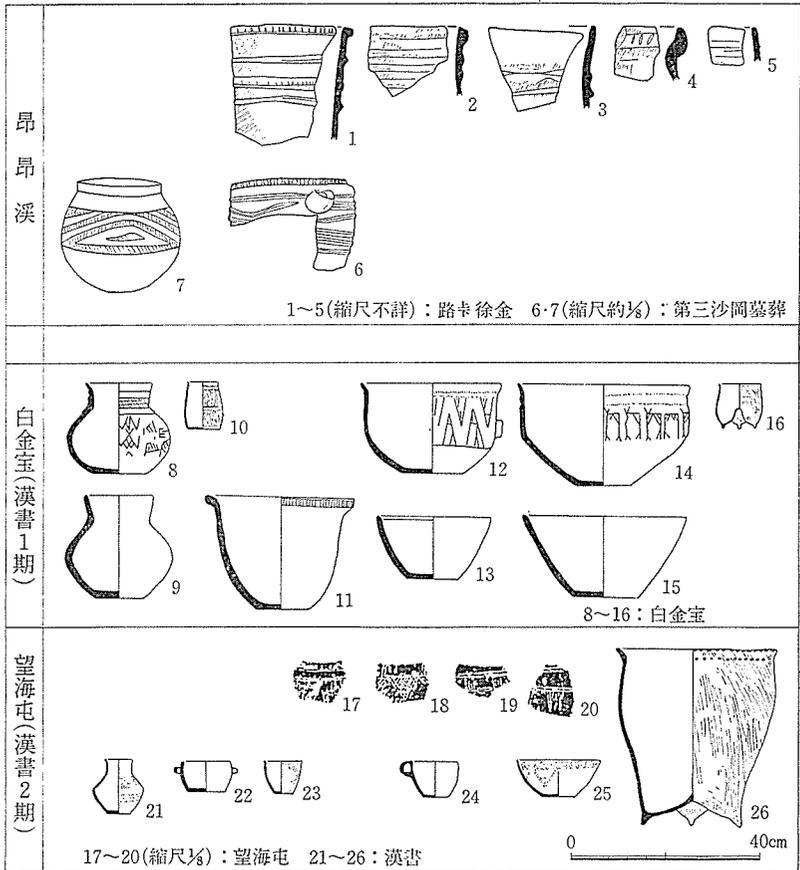
(B・C 三二二〇〜三二二一)とする説と、郭沫若「祝草」(『金文叢考』一九五四年)の昭王(B・C 三二二一〜二七九〇)とする説がある。燕王職武器の出土量からしても後者の説の妥当性が高いが、どちらにしろ戦国後期初頭と言える。

③⑩ 『史記』卷110匈奴列伝の記載により遼西郡の設置が知られる。これは趙武靈王(B・C 三二五〇〜二九八年)の長城建設後のことであるから、燕昭王代(B・C 三二二一〜二七九年)とする考え方が一般的である。よって燕の遼西への流入を戦国後期と考える。なお、王兆軍「内蒙古昭烏達盟奈林市發現戰國墓」(『考古』一九六四年第一期)に戦国墓の報告があるが、伴出遺物からは戦国どの段階であるか決め難い。

#### 四 黒龍江省——地域別土器編年(三)——

##### (一) 松嫩平原

松嫩平原最古の土器群は昂昂溪文化<sup>①</sup>である。所謂細石器文化であるが、層位的資料や一括遺物がほとんどないところから、細分作業は困難と言えよう。器種は深鉢が主であり、深鉢の多くは筒状あるいはやや口縁部がすぼまり胴部がふくらむ平底土器である。また、注口付深鉢(第一二圖6)という特異な器形もみられる。胎土に貝殻片を混入する例にも特徴がある。文様は隆起文(同1〜6)が主で、刺突文、押圧方格文、幾何学文(同7)が知られる。この内、隆起文に関しては、アムール川中流域のノヴォペトロフカ文化との類似がみられる。また隆起文と共に刺突文・押圧方格文については、三江平原の新開流上・下層に類似遺物がみられるところから、これに時期的併行関係を考える。吉林省洮安県双塔屯では、昂々溪文化の特徴的土器と共に、遼西の特色を示す長幅連続弧線文土器が存在し、これらが共伴関係を示すものとすれば、遼西の紅山文化・富河文化との対応も想像される。但し、幾何学文土器の存在は昂々溪文化がかなりの時期幅を持つことを



第12図 松嫩平原先史時代土器変遷図 (空欄部分は土器型式未確認部分, 縮尺 1/16)

示している。

松嫩平原では、昂々溪文化以外に白金宝文化<sup>⑥</sup>が知られる。これはすでに鬲を持っておりなど、昂々溪文化とは时期的隔たりが存在している。白金宝文化は白金宝類型<sup>⑦</sup>と望海屯類型<sup>⑧</sup>に細別され、吉林省大安県漢書<sup>⑨</sup>ではそれが層位的に示されている。

白金宝類型(同8、16)は、壺、深鉢、浅鉢、支座、鬲、鼎などからなる。鬲(同16)は繩席文を施すものが大半であり、施文法から言えば遼西の夏家店下層文化に類似するが、器形は異なり、夏家店上層文化や瀋陽地区の新樂上層に似る。壺、深鉢、浅鉢は筥描き状の幾何学文を飾るところに特徴がある。

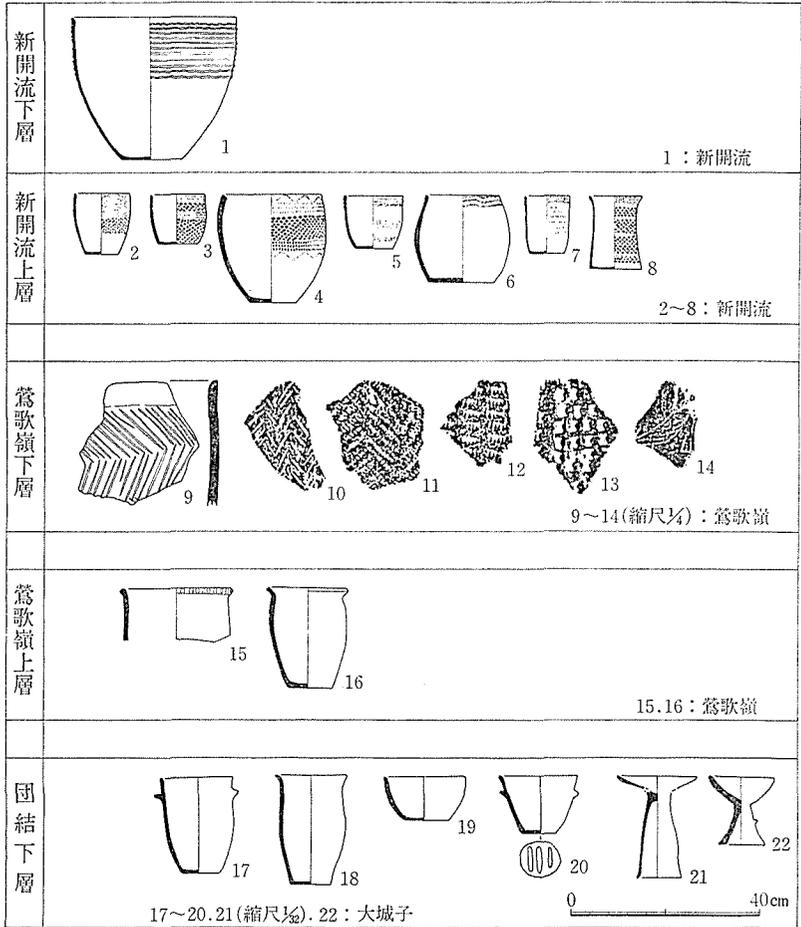
また、このような特徴を持った土器

群を、吉林省大安県付近では漢書1期文化と呼んでいる。ここでは両者を同一群とし、白金宝類型とする。吉林省大安県東山頭<sup>10</sup>の墓葬で示される様に、この時期はすでに青銅器文化の段階にある。これは遼西の夏家店上層に対応するものと考えられる。また、遼寧省翁牛特旗大泡子<sup>11</sup>では、同一墓から夏家店上層文化に相当する土器と共に、白金宝類型の特徴を示す幾何学文土器が伴出しており、この年代観を妥当なものにしている。続く望海屯類型との関係から考慮すれば、白金宝類型は遼東半島上馬石A地点上層期、崗上墓・樓上墓期に相当するものと想像される。

大安県漢書で層位的に後出するとされた漢書2期文化は望海屯類型（同17～26）にあたる。これは、壺、深鉢、浅鉢、甗などからなる。甗は繩席文を持つが、白金宝類型より退化して分襠部が矮小化している。白金宝類型に続いて幾何学文がみられる。また、彩絵陶<sup>12</sup>が多く存在することにも特徴があり、の中には幾何学文を構成するものもある。この様な望海屯類型は、青銅器や陶範あるいは鉄器を伴うところから下限は漢代とされ、遼東半島尹家村12号墓期以降に併行しよう。

## （二）三江平原・牡丹江流域

本地域最古の土器群は、今のところ、黒龍江省密山県新開流にある。新開流は上・下層に分層されており、有効な資料となっている。下層は平底で口縁がやや広がった深鉢（第三図1）が知られる。文様は刻み目三角文、刻み目菱形文、刺突槽凹文、波状隆起文、平行隆起文などがある。押圧方格文や隆起文には昂昂溪文化との関連が想定できる。一方、上層（同2～8）は器形にやや多様性がみられ、下層より口縁のすばまった深鉢（同4・6）や口縁が外反した筒形の深鉢（同8）などがある。押圧魚鱗文、押圧菱形文、短斜線状刺突文、隆起文などが複合して施される場合が多い。特に魚鱗文や菱形文が多いところに特徴がある。上層も同様に昂昂溪文化との関連が指摘できる。また、上・下層にみられる菱形文は沿海州のオンノフカII<sup>13</sup>に対比できる。上層の菱形文と刺突文が複合文様化している（同2～4・8）点では、東北朝鮮の西浦項2期に対比できよう。<sup>14</sup>



第13図 三江平原・牡丹江流域土器変遷図(空欄部分は土器型式未確認部分, 縮尺 1/16)

層位的に先後関係が分かる遺跡として、別に黒龍江省寧安県鶯歌嶺上・下層<sup>⑮</sup>がある。下層は篋描き状魚骨文(同9・10)を特徴とする土器群で、他に列点魚骨文(同11)・刺突文(同12・13)などが知られる。沿海州のザイサノフカ<sup>⑯</sup>と類似するという指摘があるが、ここには特徴的な雷文がみられず、渦文に類似する文様(同14)があるところから、ザイサノフカ以前のセニキナ・シヤブカⅡ<sup>⑰</sup>に對比することができると思われる。また、その点から言えば東北朝鮮の西浦項3期に対応して考えられ、他の文様からして

も西浦項3期より新しいものとはいえない。上層(同15・16)は素文土器を特徴とし、僅かに口縁端部を刻むという手法がみられる。深鉢、鉢、甕などからなり、少量ながら泥質黒陶も存在する。年代的には鶯歌嶺下層と次に述べる団結下層の間に位置づけられよう。

黒龍江省東寧県団結下層<sup>③</sup>は、遼東半島尹家村12号墓期に類似した土器群(同17・22)からなる。特に長い筒状の脚を持つ高杯(同21)はその関係を物語っている。他に瘤状突起を持つ深鉢や甕が存在する。なお、団結下層は層位的に1・2期に分かれるが、2期は五銖銭が伴出している様に漢代以降であり、団結下層1期を尹家村12号墓期併行ないしそれ以降のものと考える。

この様に松嫩平原と三江平原・牡丹江流域は、当初、昂昂溪文化と新開流上・下層に相似性が存在し、広範な地域圏が知られる。これが両地域を合わせて黒龍江省として認識した由縁でもあるが、その後、編年の欠落を持ちながら異なった状況を呈する。前者における白金宝文化の遼西の影響であり、後者における、沿海州・東北朝鮮との強固な結び付きと共に、団結下層にみられる遼東との類似性である。これらは中国東北地方内の地域圏の変動による結果として解せられるのであるが、当初の地域圏を以て黒龍江省として設定し、個別地域編年を呈示したのである。

- ① 梁思永「昂昂溪史前遺址」(『梁思永論文集』一九五九年)。黒龍江省博物館「昂昂溪新石器時代遺址的調査」(『考古』一九七四年第二期)。
- ② 奥田直栄「北滿昂昂溪発見の細石器包含層」(『人類学雑誌』五九巻第二号 一九四四年)。
- ③ A. П. Девянико: *Новонепростая культура Среднего Амура, Новосибирск, 1970.* 加藤晋平「ミリアの新石器土器」(『縄文土器大成』五一 一九八二年)。
- ④ 黒龍江省文物考古工作队「密山県新開流遺址」(『考古学報』一九七九年第四期)。
- ⑤ 吉林省文物工作队「吉林洮安県双塔屯原始文化遗址調査」(『考古』一九八三年第二期)。
- ⑥ 楊庚、譚英傑、張泰湘「黒龍江古代文化初論」(『中国考古学会第一次年会論文集』一九七九 一九八〇年)。
- ⑦ 黒龍江省文物考古工作队「黒龍江肇源白金宝遗址第一次發掘」(『考古』一九八〇年第四期)。
- ⑧ 丹化沙「黒龍江肇源望海屯新石器時代遺址」(『考古』一九六一年第一期)。
- ⑨ 吉林大学歴史系考古專業・吉林省博物館考古隊「大安漢書遗址發掘

的主要収獲」(『東北考古与歴史』第一輯 一九八二年)。

⑩ 吉林省博物館「吉林大安東山頭古葬清理」(『考古』一九六一年第八期)。

⑪ 賈鴻恩「翁牛特旗大泡子青銅短劍墓」(『文物』一九八四年第二期)

⑫ 吉林省農安縣田家坨子(吉林大學歷史系「吉林農安田家坨子遺址試

掘簡報」(『考古』一九七九年第二期)にも彩繪陶が存在するが、望海屯類型と土器様相を異にし、吉長地区の長蛇山・土城子と望海屯類型の中間地点の様相を呈している。

⑬ A. Л. Орджанков: Неолит Сибиря и Дальнего Востока (Камчатка)

век на Территории СССР. Москва, 1970)

⑭ 金用珩・徐國泰「西浦項原始遺跡發掘報告」(『考古民俗論文集』四一九七二年)。

⑮ 黑龍江省文物考古工作隊「黑龍江寧安縣鶯歌嶺遺址」(『考古』一九八一年第六期)。

⑯ Т. И. Андер烈耶夫「在大彼得灣沿岸及其島嶼上發現的公元前第二至第一千年的遺跡」(『考古學報』一九五八年第四期)。

⑰ 前掲注⑬文獻。

⑱ 前掲注⑥文獻。

## 五 中国東北地方における各地区相互の関係

各地域の個別編年を、遼東半島土器編年との対応によって整理し、中国東北地方の編年網としたのが第三表である。

当初、遼東半島、瀋陽地区、西北朝鮮、吉長地区を一带とする遼東には、短幅連続弧線文土器を特徴とする大きな土器地域圏が存在する。一方、同じロッカーパターンを手法を用いながら、施文原体・施文法を異にする長幅連続弧線文土器が遼西一円に分布している。この分布は河北の京津唐地区にまで達するが、同種の施文技法はこれらより古いとされる中原の裴李崗・磁山文化にまで知られる。この施文法を伝播関係として捉えうるかは定かではない。ともかく、遼西を地域圏とする長幅連続弧線文土器と、遼東一円を地域圏とする短幅連続弧線文土器は、遼河を挟んで対立的に存在している。

この地域圏の対比は続く時期にも存続している。瀋陽地区・吉長地区は不明なもの、遼東半島から西北朝鮮はひき続き同一地域圏を示し、小珠山中層期・吳家村期と続く。遼西では吳家村期併行として小河沿文化が対峙している。この時期、遼東半島には確実に大汶口文化前・中期の搬入品が知られ、山東との関係が深い。同じく大汶口文化中期の影響を受けるとされる遼西の小河沿文化は、仮にそれが事実であるとすれば、遼東半島経由というよりは、黄海沿岸を北上した影響関

第3表 中国東北地方先史時代土器編年表

中 原	遼 西	山 東	遼東半島	瀋陽地区	西北朝鮮	吉長地区	松嫩平原	三江平原 牡丹江流域
裴李崗・磁山								
半 坡	紅 山	北 辛						
後岡 廟底溝		大汶口前期	小珠山下層	新楽下層	美松里下層	二道嶺子	昂 昂 溪	新開流下層
大河村3期	小河沿・富河	中 期	小珠山中層		土 城 里			新開流上層
廟底溝Ⅱ期		後 期	吳 家 村		堂山下層			鶯歌嶺下層
後岡Ⅱ期		龍山前期	小珠山上層	偏卜子	堂山上層			
客省庄Ⅱ期	夏家店前期 下層	中 期	双砬子1期		新岩里1期			
二里頭		岳 石	2期					
二里岡			3期					
殷後期			前期					
西周	魏 營 子		上馬石A地点下層	高 台 山	新岩里Ⅱ期			鶯歌嶺上層
春秋	夏家店上層		上馬石A地点上層	新 楽 上 層	美松里上層		白 金 宝 (漢書1期)	
戰 国			崗上墓・樓上墓			西 星 駟 長 土 團 星 蓮 蛇 城 山 哨 溝 山 子	望 海 屯 (漢書2期)	團 結 下 層
西 漢	燕		尹家村12号墓	郷家窪子				

(破線矢印は遡る可能性を示す)

係と考えるべきであろう。いずれにしても、この時期、大汶口文化の拡散現象の影がこれら地域にみられる。一方、吉長以北はどうであろう。松嫩平原の昂昂溪文化、三江平原・牡丹江流域の新開流上・下層は、隆起文・刺突文を特徴として、遼西・遼東とは異なった土器群を示している。それらの遼西・遼東との対比は詳細には示しきれないが、朝鮮半島との関連および長幅連続弧線文土器の伴出関係からすれば、少なくとも富河文化以前には併行関係が知られる。また、昂昂溪文化はアムール川中流域と、新開流上・下層は沿海州・東北朝鮮との関連が深い。この様にみれば、遼東半島吳家村期以前の中国東北地方には、遼西、遼東、黒龍江省を中心とする三土器地域圏が鼎立した状態が存在する。遼西の長幅連続弧線文土器、遼東の短幅連続弧線文土器、黒龍江省の隆起文・刺突文土器である。この鼎立した地域圏こそ新石器時代を通じた基本的地域区分となっている。

遼西・遼東に影響を及ぼした大汶口中期文化の拡散現象に対して、大汶口後期文化はその力を次第に縮小させているものの、その系譜をひく山東龍山文化はひき続き遼東半島に影響を及ぼしている。遼東半島は龍山文化そのものの土器様相を示すが、在地系土器群の存在からすれば、前代以来の西北朝鮮を含む遼東の地域圏は存続している。一方、龍山文化後期には遼西でも龍山文化の流れをひく夏家店下層前期文化が成立する。この系譜を河南龍山文化に求めるか、あるいは山東龍山文化に求めるかは、にわかに決め難い。確実には、夏家店下層文化中期に至れば、在地的特徴を持ちつつも、中原の二里頭・二里岡文化との類似性を示し、それらの影響が強い段階に至っている。と共に、高・脈を中心とする土器組成に変化が生じ生活様式の変革が知られる。殷後期併行と考えられる夏家店下層後期文化もひき続き中原の影響を受けており、殷後期ないし周初の銅器群が遼西一帯に分布する事実は、土器に示された関係の深さと符合するものである。

この様に次第に中原との関係を増している遼西に対して、遼河を挟んで対立的な地域圏を示す遼東はどうであろう。山東龍山文化の影響下にある小珠山上層期は、在地系土器群の存在により遼東一円から西北朝鮮にかけて土器地域圏を維持している。続く双砬子Ⅰ期は、前代の系譜上にありながら、彩絵陶を出現させると共に、その文様構成上在地性が知られ

る。中原の二里岡期以前と考えられる山東の岳石文化の影響は、続く双砬子2期にみられる。双砬子2期から双砬子3期前期にかけては折腹盆の存在をみれば、遼西の夏家店下層中期に併行しよう。また、そこでの彩絵陶の出現は、編年的にみて遼東の影響とも解せる。同じ様に、山東岳石文化での彩絵陶の出現も、遼東からの逆流入である可能性が高い。また、双砬子2期以降、甗が出現し小珠山上層期以降の変革に加え、甗を中心とする生活様式の変化が知られる。これは、遼西の高・甗を中心とするものに対しては、高が存在せず甗の発達が著しい点に地域的な明確な差異がみられる。同時に、双砬子2期までの山東の強い影響に対し、双砬子3期以降、山東が中原の影響化に入ったがために、山東自身が影響力を失ったことは、遼東半島の独自性を強めさせる一因ともなっている。と共に、遼東としての在地的地域圏を存続せしめることにもなる。

翻って遼東の在地的地域圏の特性を考えるならば、小珠山上層期以降の幾何学文土器に注目される。朝鮮北部から遼東にかけての幾何学文は数類型に分けて考えうる。小珠山上層期から双砬子3期前期にかけて併行すると考えられる幾何学文は、偏卜子類型を特徴とする直線帯を斜線で埋めた重層三角文(第七図6)と、新岩里1期を特徴とする変形雷文系幾何学文(第八図17・18)である。両者の先後関係は先述した様に前者を古いと考える。また、その幾何学構成は双砬子1期の彩絵陶のモチーフにもなっている。ところで、直線帯を斜線で埋める雷文系幾何学文は東北朝鮮から沿海州にも知られる。東北朝鮮で層位的に検証されている様に、雷文系幾何学文は渦文(螺旋文)から派生したものである。東北朝鮮から沿海州にかけては、西浦項4期↓ザイサノフカ↓農浦洞↓茂山虎谷の順に雷文系幾何学文の退化過程が考えられており、西北朝鮮の新岩里1期のものは、これらの最も退化した段階にあたとされている<sup>③</sup>。また、より退化形態を示したものとしては、時期の下った遼東半島の上馬石A地点上・下層にみられる。この様な幾何学文に認められる類似性は遼東半島・瀋陽地区から西北朝鮮一帯の地域圏に加え、三江平原・牡丹江流域、沿海州、東北朝鮮の地域圏に共通してみられるものである。これは、各々の地域圏が土器組成や土器形態に個々の地域性を示しながらも、相互に強い交流のあったものと解せら

れるのであり、広範な土器地域圏の変容が示される。この時期、小珠山上層期にあたり山東龍山文化に併行している。小珠山上層期以降の遼東を中心とする地域圏の在地的特性はこの変様に伴うものであり、前代以来の地域圏を基盤として成り立っている。更に中国東北地方の地域圏の鼎立した状況を崩すこの動きは、朝鮮半島全体の地域圏の変容と関連がある。しかしながら、この点に関して詳細については別稿に譲ることとしたい。

さて、朝鮮北部との類似性を示しながら地域圏を存続させる遼東に対し、常に対立的情况を示す遼西は、高・瓶を中心とする土器組成を持ち、中原的青銅器文化の影響を受けている。遼西は、夏家店下層文化後期以降、魏營子類型、夏家店上層文化に移行するにつれ、同器種構成を示しながらも次第に質が粗製化しており、中原文化との隔絶を切っ掛けとして地域的独自性を形成するに至る。これは周代社会の歴史的状况にも反映しており、この在地的展開こそが夏家店上層文化時期に遼寧式銅劍文化の成立を促しているのである。と共に内在的發展方向は瀋陽地区に夏家店上層文化に属する新樂上層を成立せしめ、ここに初めて遼河を越えた地域圏の拡大が知られるのである。更に、高・瓶を中心とする土器組成は、渾河・松花江を通じて吉長地区への伝播をはたしている。また、松嫩平原には夏家店上層期に併行して鬲を持つ白金宝類型の成立が知られる。この伝播系路は明確ではないが、共伴関係からしても、遼西の夏家店上層文化の拡散現象の中で捉えられよう。

さて、李康承<sup>④</sup>は、青銅器を中心に夏家店上層文化と遼寧式銅劍文化という文化設定を行い、それらを対立的様相として把握している。しかし、これは遼寧内での地域差と時期差を無視したが故の議論である。そこで設定された両文化は、大きく言って遼寧式銅劍の有無をもとにするものであり、その編年的検討を避けたため、本来、夏家店上層段階で発生した遼寧式銅劍を、発生期段階以前と以後とで別々の文化体系と見做す誤謬を犯している。その結果、遼西・遼東に普遍的に存在する遼寧式銅劍を以て一つの文化圏を設定し、それ以前から存在した遼西の夏家店上層文化を別の文化として設定したのである。しかし、遼寧式銅劍の編年的検討からみれば、その初現は遼西の夏家店上層段階にあり、それが遼東各地へ

伝播していったとみてよい。すなわち、遼西では、夏家店下層段階で青銅器を吸収し、それを消化発展させたのが、夏家店上層段階であったのである。しかもその夏家店上層時期、遼西から瀋陽地区は一つの類似した土器地域圏を形成し、吉長地区も遼西的な土器組成を示す過渡期にあり、青銅器の伝播段階にあたる。一方、この段階、遼東半島は従来の脈を中心とする土器組成のもとに独自の展開を果たしている。この遼寧式銅劍の伝播時期は、美松里型壺に伴う遼東半島の例や、瀋陽地区・吉長地区での遼寧式銅劍の出土例に知られる様に、上馬石A地点上層期にあたる。

改めて遼寧式銅劍を中心とする青銅器文化の伝播状況を問題にすれば、それは各地での在地的な土器様相・生活様式に適合する形で、在地的な展開を果たしている。林漢<sup>⑤</sup>が示した様に遼東半島と吉長地区での遼寧式銅劍の退化過程上の系譜の違いや、松嫩平原での銅斧を中心とする銅器文化の展開、朝鮮半島での細形銅劍の発展などがそうである。ここで特筆すべきは、青銅器文化が新石器時代以来の動きの少ない地域圏を越える形で拡大する状況と、それに相俟った形あるいはそれに先行する形で、高を中心とする土器組成の変化、すなわち生活様式の変革が広がっていった動向にある。しかしながら、その過程は必ずしも青銅器文化の伝播状況と完全に一致するものではなく、在地性の強い遼東半島から西北朝鮮、東北朝鮮、三江平原・牡丹江流域が一つの盾となることにより、高を中心とする土器組成は、吉長地区や松嫩平原という北部方面へのみ広がっていったのである。

- ① 東北朝鮮の西浦項2期にみられる菱形文と短斜線文の複合文様を有する土器を以て、西浦項2期と三江平原の新開流上層の併行関係を想定するならば、西浦項2期の複合文様は西朝鮮の智塔里1号住居址に通じるものであり、この種の西朝鮮特有の複合文様に類似したものが遼東半島小珠山中層期（第四図9）にみられることを根拠に併行性を想定していくと、黒龍江省の隆起文土器や刺突文土器は、遼東半島小珠山中層期以前のものであることが考えられる。
- ② 金用珩・徐國泰「西浦項原始遺跡発掘報告」（『考古民俗論文集』四一九七二年）。
- ③ 강승광 「우리나라新石器時代변개文様土器遺跡의年代에 대하여」（『考古民俗論文集』六 一九七五年）。
- ④ 李康承「遼寧地方의青銅器文化」（『韓國考古學報』六一九七九年）。
- ⑤ 林漢「中國東北系銅劍初論」（『考古學報』一九八〇年第二期）。

個別地域の先史土器編年の呈示から始め、遼東半島土器編年をもとに、各地域相互の共伴関係、土器推移の相似性あるいは周辺諸地域との関連の中から、中国東北地方における土器編年網を確立したと考える。この土器編年網こそ、朝鮮・日本における新石器時代から青銅器時代への推移、あるいはそれら諸地域の年代観を含めた東北アジア的動向を押さえる基礎的編年観となりえよう。本稿の一つの目的に、東アジア的視点を持つための基礎的編年観を確立することがあったのである。同時に、この編年網の上に、中国東北地方の土器地域圏の変容を示し、新石器時代から青銅器時代への変遷過程の特徴を表わした。これは、土器地域圏を成立せしめている要因、あるいは変容を促した動因の説明に欠けるものの、この種の解釈は、自然環境・生業体系を含めた社会性の追求を待つて初めて可能になるものと考えられる。ここでは、歴史的な現象面を認識しえたにとどめ、最後に、その現象面をまとめることにより結論としたい。

当初、遼西、遼東、黒龍江省という三土器地域圏の鼎立した状況が存在する。この状況が変化するのは、まず山東龍山文化併行の小珠山上層期にある。遼東から東北朝鮮、三江平原・牡丹江流域そして沿岸州に至る雷文系幾何学文土器を特徴とする広範な地域圏の成立である。これは、その前段階である小珠山中層期・吳家村期における朝鮮半島の土器地域圏の変容に伴うものと考えられる。しかしながら、この広範な地域圏は、一つには遼東、そして一つには東北朝鮮から三江平原・牡丹江流域という主として二つの地域的特性を持つまとまりの上に、雷文系幾何学文土器によって包括的に認識された土器地域圏である。その意味では、新石器時代を通じて、遼西と遼東の対立した様相、そして松嫩平原は不明なもの、三江平原・牡丹江流域にみられる三つの土器地域圏は存続しているといえよう。この間、遼西は中原との、遼東は山東との交渉を多とする。遼東における大汶口文化の影響は質的に根本的変革を促すものではなかった。続く山東龍山文化の影響は遼東半島を龍山文化に帰属させているものの、遼東としての在地性を温存させているのは沿海州にまで至る広範な

地域圏の成立によるものである。このために、この時期以降、山東の影響の排除された段階で遼東の在地性が顕在化していくのである。決定的な地域圏の崩壊は、新石器時代段階である程度存続した土器地域圏を凌駕する形で、鬲を中心とする土器組成の変革が広がっていく現象にみられる。しかもこの段階が春秋期における青銅器文化の拡散現象と重なっている点が重視される。すなわち、春銅器時代の到来が明らかに新石器時代の土器地域圏を越えて、より広範な土器地域圏を形成することにある。瀋陽地区、吉長地区、松嫩平原がそうである。一方、遼東半島・西北朝鮮には、青銅器は伝播しているものの、鬲を中心とする土器組成の変化は認められない。在地性の強い遼東半島から西北朝鮮、更に東北朝鮮、三江平原・牡丹江流域にかけての広範な土器地域圏にはばまれることにより、遼西的な土器組成の変革は瀋陽地区以北に限られたのである。この様に最後まで強い在地性を示す遼東半島から西北朝鮮は、その地域圏を凌駕する動きが青銅器文化段階に於ても為し遂げられなかった。燕文化の流入後、明刀銭や戦国銅器の広がっていく地点が西北朝鮮までに限られることも、従来の土器地域圏内での伝播にすぎないのである。中原の文物が先史以来の地域圏を破る形で西北朝鮮を越えて本格的に朝鮮半島に流入するのは、秦漢帝国の成立を待たねばならなかったのである。

(京都大学埋蔵文化財研究センター助手)

謝辞 本稿は京都大学大学院に提出した昭和五八年度修士論文の一部を書き改めたものである。本稿の作製にあたって、未発表資料の閲覧を御許しただくと共に、様々な御指導をいただいた澄田正一・小野山節の両先生に厚くお礼申し上げます。また、樋口隆康、林巴奈夫、蔡鳳書の各先生、岡内三眞、宇野隆夫両氏をはじめとする考古学研究室の諸氏、ならびに京都大学埋蔵文化財研究センターの諸兄には多くの御世話と御教示を得た。記して感謝の意を表します。

# The Chronology and Regional Particularity of the Earthenware in Manchuria in the Prehistoric Age.

by

Kazuo Miyamoto

The author chronologizes the earthenware in each areas of Manchuria, particularly in the Liaodong 遼東 Peninsula, through considering the similarity of the style and its changing process of the earthenware of each areas and the relation with other regions around there. Next he shows the change of the area where each style of the earthenware was found, and characterizes its transformation from the Neolithic age to the Bronze Age. Through the Neolithic age the Liaoxi 遼西, Liaodong and the province of Heilongjiang 黑龍江 had own style of the earthenware each other, but at the end of the Neolithic age its geographical distribution partially changed and at the Bronze Age definitely collapsed. When the bronze ware spread from Liaoxi to Liaodong and the province of Heilongjiang, the new composition of the earthenware spread beyond the area where the old style ones had been found, and the geographical distribution expanded. Nevertheless the change of the geographical distribution at the end of the Neolithic age prevented the reform of the composition of the earthenware from reaching the Liaodong Peninsula and the Korean Peninsula. The area from the Liaodong Peninsula to the northwest of Korea where own style was found set limits to the sphere of influence of the culture of Yan 燕 within its own area. The civilization of Zhongyuan 中原 did not flow into the Korean Peninsula on a full scale until Qin and Han Dynasties were established. As mentioned above, the confirmation of the chronology in the region in question offers a fundamental framework in order to study the prehistoric society in Northeast Asia.